下安原海岸遺跡

1988

石川県立埋蔵文化財センター

遺跡調査状況

例　　言

1　本書は石川県金沢市下安原（しもやすはら）町所在の下安原海岸遺跡の発掘調査報告である。

2　発掘調査は、大規模自転車道整備事業金沢小松自転車道に係るもので、石川県土木部道路建設課の依頼により、昭和62年7月20日から同年8月28日まで石川県立埋蔵文化財センターが実施し、費用は同建設課が負担した。

3　調査担当者は田嶋明人（同センター職員）、岡本恭一（同センター職員）、伊藤雅文（同センター嘱託）であり、芝田　悟（同センター職員）、田畑　弘（同センター調査員）がこれを補助した。

4　遺物整理は社団法人　石川県埋蔵文化財整理協会に委託し実施した。

5　本書の編集は、田嶋、岡本、伊藤の協議のもとに岡本が行なった。

6　本書の執筆は次のとおりである。

　Ⅰ 位置と環境・Ⅲ 遺構と遺物（弥生土器・その他）伊藤

　Ⅱ 調査の経過・Ⅲ 遺構と遺物（上記の他）　　岡本

7　本書の挿図中の方位はすべて磁北である。

8　本書の挿図中の水平基準の数値は標高である。

9　当調査の遺構・遺物の実測図・写真・出土遺物等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

頁

Ⅰ　位　置　と　環　境 …… 1

1　下安原海岸遺跡の地理的位置 …… 1

2　原始時代の金沢平野 …… 1

Ⅱ　調　査　の　経　過 …… 5

1　調査日誌　（抄録） …… 5

2　発掘調査区 …… 5

Ⅲ　遺　構　と　遺　物 …… 9

1　基本層序 …… 9

2　遺　構 …… 9

遺構の概要 …… 9

住居跡 …… 10

3　遺　物 …… 11

(1)　金　属　器 …… 11

銅　鏃

(2)　石　製　品 …… 11

石鏃　石錐　楔形石器　敲石・磨石　管玉・玉未製品　針状石製品

(3)　土　製　品 …… 18

土錘　不明土製品　土器溜りの土器　住居跡出土の土器　包含層出土の土器

弥生土器　条痕文系土器　その他の土器

土器観察表 …… 34

図　版

挿 図 目 次

頁

第１図　下安原海岸遺跡位置図 …… 1
第２図　下安原海岸遺跡周辺遺跡分布図 …… 2
第３図　低湿地を中心とした遺跡分布図 …… 3
第４図　発掘調査区位置図 …… 6
第５図　遺構全体図 …… 7･8
第６図　住居跡実測図 …… 10
第７図　銅鏃・石鏃・石錐・楔形石器実測図 …… 13
第８図　楔形石器実測図 …… 14
第９図　玉石核実測図 …… 15
第10図　管玉・玉石核・剥片・針状石製品実測図 …… 16
第11図　楔形石器・敲石・磨石・砥石・土製品実測図 …… 17
第12図　土器溜り出土土器実測図 …… 19
第13図　　同　　上 …… 20
第14図　　同　　上 …… 21
第15図　　同　　上 …… 22
第16図　　同　　上 …… 23
第17図　　同　　上 …… 24
第18図　住居跡出土・各グリッド出土土器実測図 …… 25
第19図　各グリッド出土土器実測図 …… 26
第20図　　同　　上 …… 27
第21図　弥生土器・その他実測図 …… 31
第22図　　同　　上 …… 32
第23図　　同　　上 …… 33

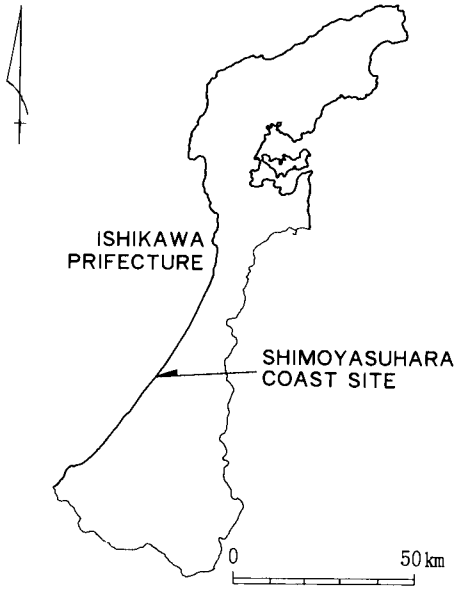
図 版 目 次

原色図版　遺跡調査状況
図版第１　堆積砂の除去状況・調査風景
図版第２　湛水した調査区・排水作業後の調査区
図版第３　自然河道より南西側調査区の遺構検出状況
図版第４　住居跡床面出土遺物（第17図－66・68）
図版第５　Ｃ－１グリッド遺物出土状況（第18図－79）・Ｃ－２グリッド遺物出土状況（第18図－83）
図版第６　ピット１覆土・ピット２覆土
図版第７　自然河道の堆積状況
図版第８　自然河道より南西側の調査状況
図版第９　自然河道より南西側の調査状況・Ｂ－６・Ｃ－６グリッド構状の落ち込み
図版第10　Ｃ－７・Ｃ－８グリッド土器溜り遺物出土状況
図版第11　Ｃ－７・Ｃ－８グリッド土器溜り遺物出土状況・調査区全景
図版第12　砂丘上より調査区を望む・埋め戻し状況
図版第13　土器溜り・住居跡・包含層出土土器
図版第14　土器溜り・住居跡出土土器
図版第15　弥生土器・その他
図版第16　弥生土器・その他
図版第17　銅鏃・石鏃・石錐・楔形石器
図版第18　管玉等の石核・剥片・砕片・擦切溝をもつ剥片・針状石製品・管玉製品
図版第19　敲石・磨石・砥石・砥石として用いられた軽石(Ｃ)の使用痕
図版第20　高杯（第20図－92）杯部外面の細く長いミガキ痕（約４倍）・他

Ⅰ　位置と環境

1　下安原海岸遺跡の地理的位置

石川県は日本海に突き出ている能登半島を擁し、南北に長い海岸線を有している。能登半島は隆起性の地形とともに日本海の荒波に洗われて岩場中心の海岸を呈している。一方それより南では日本でも有数の砂丘地帯を形成し、対照的な景観を示している。内灘砂丘や羽咋砂丘などが連続し延べ100kmの長さに達している。下安原海岸遺跡はこの中ほどに位置している。砂丘の形成は海水準と陸上の地形によって規制され、海岸に広がる砂浜が砂丘の砂の供給源であるらしい。冬場の季節風による荒波によって砂が大きく削られ、夏場に飛砂によって厚く堆積し、春や秋は比較的安定しているらしい。羽咋砂丘は内・中・外列の砂丘が形成され、下安原遺跡のある安原砂丘では１列のみ形成されている。[1・2]



第１図　下安原海岸遺跡位置図

松任市を中心とする金沢平野南半は手取扇状地によって作られ、それを挟んで南北に伏流水の自噴地帯としての低湿な地域が広がっている。このような沖積地は沈降性の地質で１～２mm／年の沈下が確認されているものの、この現象がどれほど古く遡るのか確定することはできない。藤則雄氏によると北陸各地で確認されている海水準の痕跡から、沈降の蓋然性が高いと推定している。[3]ともかく、倉部埋没林の存在などからある時期には汀線が沖合にあったことは確実で、それが時代とともに変化しているらしい。

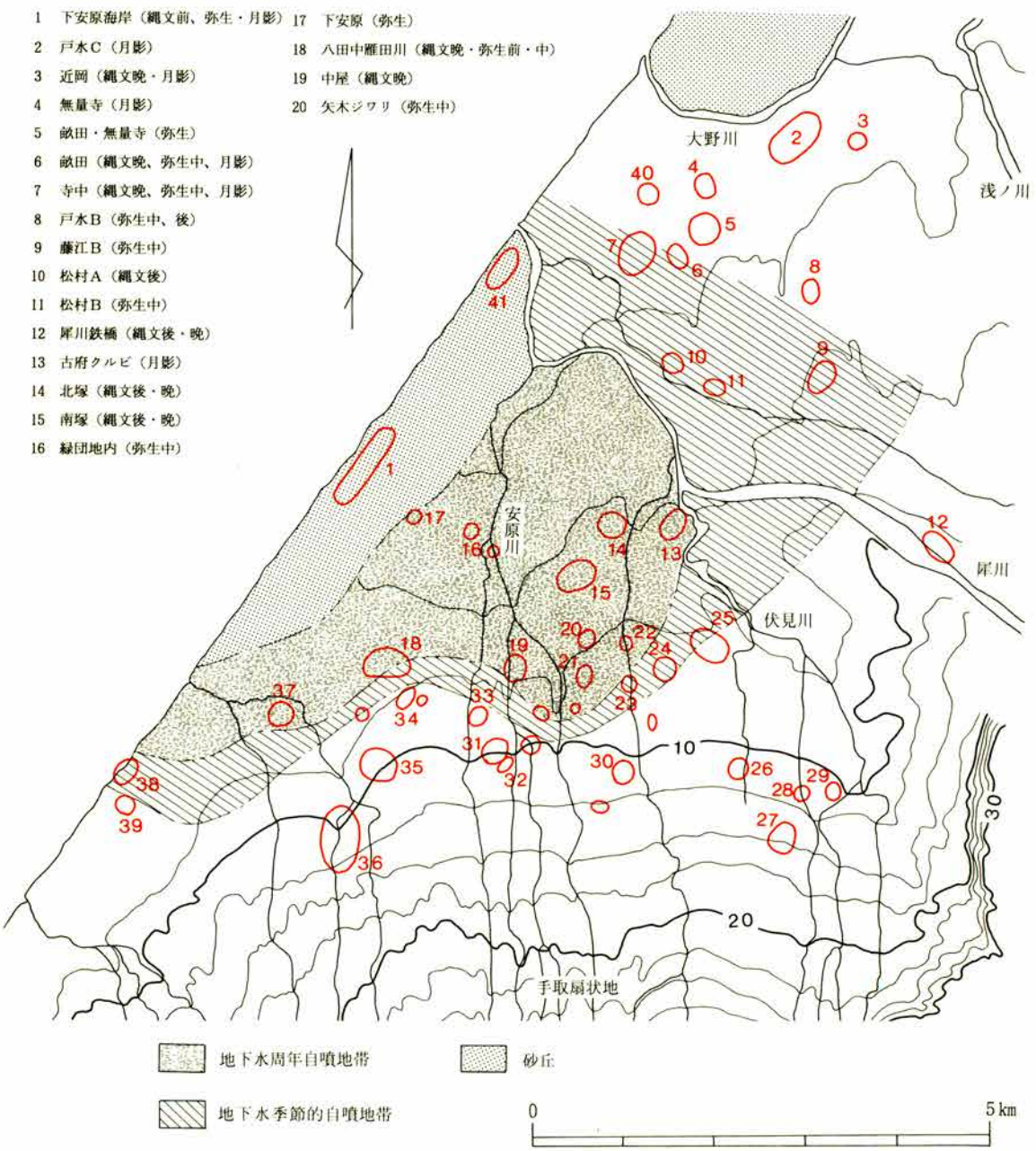
下安原遺跡は現在海抜１m前後に遺構面がある。集落の営まれた弥生時代に若干冷涼化し海水準が数m低下したらしい。当時も砂丘が形成されていたと考えられており本遺跡はその後背湿地に面していたと推測され、ここに主要な生産基盤となるべき水田あるいは畑の存在が予想される。[4]

扇央部の弥生遺跡の分布はかなり希薄な状態にあり、反対にその末端部分に初期農耕村落と考えられる弥生時代の遺跡が集中している。これらは現在の伏流水の自噴地帯に概ねオーバーラップし、少なくとも約2000年前も現在と同じような地勢であったと推定できる。もちろん沖積地であるのでミクロにみれば河谷の埋積や自然堤防の埋没等の変化はかなり激しかったと考えられる。また現在よりも北に流れていたと考えられている「手取川」が旧石器時代や縄文時代にどのような自然的影響を与えたのか考察する必要がある。

2　原始時代の金沢平野

集落をある人間集団のひとつが居住する生活の本拠と規定すると、そこの人間の目的とすると

1　下安原海岸（縄文前、弥生・月影）
2　戸水C（月影）
3　近岡（縄文晩・月影）
4　無量寺（月影）
5　畝田・無量寺（弥生）
6　畝田（縄文晩、弥生中、月影）
7　寺中（縄文晩、弥生中、月影）
8　戸水B（弥生中、後）
9　藤江B（弥生中）
10　松村A（縄文後）
11　松村B（弥生中）
12　犀川鉄橋（縄文後・晩）
13　古府クルビ（月影）
14　北塚（縄文後・晩）
15　南塚（縄文後・晩）
16　緑団地内（弥生中）
17　下安原（弥生）
18　八田中雁田川（縄文晩・弥生前・中）
19　中屋（縄文晩）
20　矢木ジワリ（弥生中）



21　矢木ヒガシウラ（弥生中）
22　森戸本町（縄文）
23　森戸住宅（縄文）
24　チカモリ（縄文後・晩）
25　古府（縄文中）
26　押野西（月影）
27　押野タチナカ（弥生中）
28　押野大塚（月影）
29　米泉（縄文後・晩、弥生中、月影）
30　御経塚（縄文後・晩）
31　横江庄下層（弥生中）
32　横江A（弥生後）
33　下福増（縄文晩）
34　八田・宮永新ハクサンダ（弥生）
35　宮永B（月影）
36　宮永市（弥生後）
37　竹松（弥生中）
38　相川新（弥生）
39　浜相川（弥生中）
40　桂（弥生）

第2図　下安原海岸遺跡周辺遺跡分布図
（本図は明治43年の陸地測量図を基に作成）

ころは生活することであり、集団が成立っていくような生活を営むために「ムラ」を作るであろう。換言すれば、居住しようとする集団の目的意識の下に集落が作られると考えられる。

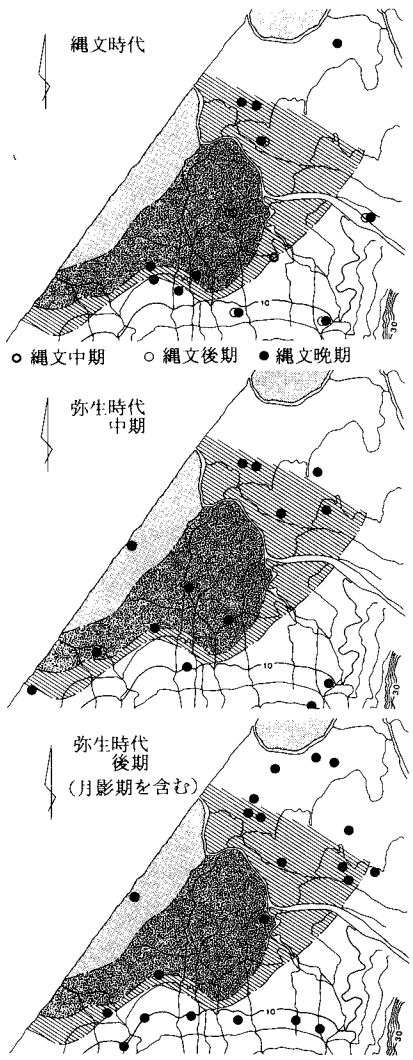
旧石器時代は更新世に属し氷河期の終末にあたる。現在より冷涼な気候で海水面もかなり低下していたらしい。金沢平野周辺では当時の生活の痕跡はほとんどみられず、ナイフ形石器・掻器・尖頭器などが出土した辰口町灯台笹遺跡や、有舌尖頭器が金沢市七ツ塚墳墓群から出土している。いずれも前面に沖積地をひかえた洪積台地上にあるという一般的な立地である。しかしながら大阪府長原遺跡などのように現在の沖積面からの旧石器の出土も知られており、[5] 現在の沖積地でも旧石器の出土する可能性を完全に否定できまい。

縄文時代に入っても遺跡数の増加はあまり顕著ではない。金沢市天池遺跡は犀川上流の河岸段丘上にありキャンプサイトであろう。[6] この他にも浅野川中流の若松から田上周辺の段丘上で押形文土器が採集されており遺跡の存在が予想される。縄文早期の集落は中期の集落のような大規模なものはあまり知られておらず、茨木県花輪台貝塚や神奈川県夏島貝塚等がある。[7] しかし世界的には、土器の出現は定住生活を示しているらしい。[8]

もちろん中期の大規模な集落でも同時期性をもつ住居はせいぜい4～5戸であることが確認されており、住居戸数のみ比べれば違いはない。しかしながら集落の広場を意識して住居を作り、長期間にわたって建替えて集落を形成している。[8] すなわち居住集団の最小領域である「ムラ」の規模の違いがあろう。このように、石川県でも小規模な遺跡である可能性が大きく、河岸段丘上などの遺跡立地に適したところは市街化が進み、これからの調査の進展に大きく依っている。

縄文前期にいたってもほぼ同じ状況である。しかし北陸全体でみると前期でも後半になると遺跡数が増えるようで、下安原海岸遺跡からも縄文前期末の土器片が採集されている。この時期は日本列島に人間が住み始めて以来最も汀線が内陸に入り込み、気候も温暖になり、現海水準よりも約2～6m高かったらしい。[3] そうすると下安原の縄文集落は水没してしまうことになるが、地勢的にそのようにならなかったと仮定してもかなり低湿な状況と思われ、その土地利用は困難なものであったと推測できる。

低湿な自噴地帯の土地利用は中期にはいって開始され、古府遺跡・北塚遺跡が、後期では北塚遺跡・南塚遺跡・松村A遺跡が知られる。全般的に遺跡数の増大が確認されて



第3図　低湿地を中心とした遺跡分布

おり、[9]新たな領域への縄文人の広汎なそして活発なる行動を推測できる。反対に現在の資料による限り自噴地帯で集落が出現しながら、本地域の遺跡数の増加があまり見られず、この地における生業は困難であったと思われる。主たる縄文ムラは段丘上あるいは丘陵上に営まれている。

ところが晩期にいたると遺跡数がかなり増えるようで、主たる集落は沖積地に営まれる傾向にある。[10]いずれの遺跡も微高地上に集落を作っており、あたかも初期農耕村落のような立地である。第3図をみてもこの地域における縄文晩期の遺跡と弥生中期の遺跡の立地がよく似ていることに注目できよう。しかし弥生時代の場合、水稲耕作という生業から集落の立地が規定されてくるものであり、稲を知らない縄文時代とは基本的に異なる。

沖積地にある縄文遺跡は西日本を中心にみられ、能都町真脇遺跡や京都府桑飼下遺跡などが著名である。渡辺誠氏は「低地の縄文遺跡が決して例外でもなく、少なくなかった」と述べている。[11]そして段丘など高所にある縄文遺跡と生業が異なるのかそれとも同じであるのか不明である。沖積地は常に河川の氾濫の危険を伴うが、微高地あるいは自然堤防上にある弥生ムラの場合、面する低地が食糧生産の場であり集落にとって欠べからざる場所である。

縄文ムラにとっても必要条件であろうが、採集経済を成立たせるための十分条件ではないであろう。洪水に遇うかもしれない。そして湿気が多く生活環境が必ずしも良いとはいえない地にあえて住まねばならなかった要因は何であろうか。ともかく現在の周年自噴地帯での原始時代の遺跡分布は希薄で、生活するのにかなり困難な地域であったことがうかがえる。奈良・平安時代になるまで本格的な開発はおこなわれない。

最後に矢木ジワリ遺跡で畿内第Ⅱ様式併行の土器が出土しているが稲作を示すような遺物の出土は少ない。またその他の遺跡においてもそれに関連する遺構・遺物の検出は少ない。フィリップ・スミス氏によると、食糧生産経済は必ずしも狩猟採集経済より豊かなものではなく「あたかも鉄粉を自動的に引き寄せる磁石のようなものでは必ずしもなかった」と述べている。[12]本地域における農耕が弥生土器の導入と期を一にしているか改めて考えてみることも必要であろう。

注

(1) 藤則雄「北陸の海岸砂丘」『第4紀研究』14－4　昭和41年

(2) 藤則雄編『石川の地形・地質案内』東京法令出版　昭和60年

(3) 藤則雄「北陸における新石器時代の海水面変動と気候変化」『石川考古学研究会会誌』第26号　昭和58年

(4) 橋本澄夫「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」『石川考古学研究会会誌』第18号　昭和50年

(5) 大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ　昭和57年

(6) 沼田啓太郎・平口哲夫・南久和「金沢市天池遺跡」『石川考古学研究会会誌』20号　昭和52年

(7) 八幡一郎編『世界考古学大系』1　平凡社　昭和34年

(8) 小林達雄「原始集落」『岩波講座　日本考古学』4　岩波書店　昭和61年

(9) 橋本澄夫「北陸における縄文世界の動態に関するノート」『石川考古学研究会会誌』第28号　昭和60年

(10) 吉岡康暢「平野・扇状地の遺跡」『金沢周辺の第4系と遺跡』昭和50年

(11) 渡辺誠「近畿縄文時代の遺跡と遺物－低地の縄文遺跡－」『古代文化』30－2　昭和53年

(12) フィリップ・スミス　戸沢充則監訳　河合信和訳『農耕の起源と人類の歴史』　有斐閣　昭和61年（原書は FOOD PRODUCTION AND ITS CONSEQUENCES 1976）

Ⅱ 調査の経過

1　調査日誌（抄録）

7月20日（月）　表土（砂）剝ぎ。

7月21日（火）　表土剝ぎ、プレハブ建上、発掘器材搬入。

7月22日（水）　調査区四周に防護柵、調査区隅に排水用の溝を設定。

7月23日（木）　2.5m四方のグリッドを設定する。泥炭層除去作業。

7月24日（金）　泥炭層除去作業。

7月27日（月）～7月31日（金）　遺構検出作業、溝状遺構、ピット、土坑検出。

8月3日（月）～8月5日（水）　自然河道掘り下げ。

8月6日（水）～8月12日（水）　遺構堀り下げ、土器群、住居跡、土坑検出。

8月18日（火）　排水作業、流れ込んだ砂の除去。

8月19日（水）　調査区全体写真撮影のための清掃ならびに写真撮影。

8月20日（木）　調査区平板測量。

8月21日（金）　遺構実測作業。

8月25日（火）　遺構実測作業、主要器材撤収、一部埋め戻し。

8月26日（水）　埋め戻し作業。

8月28日（金）　防護柵の撤去、現場引き渡し。

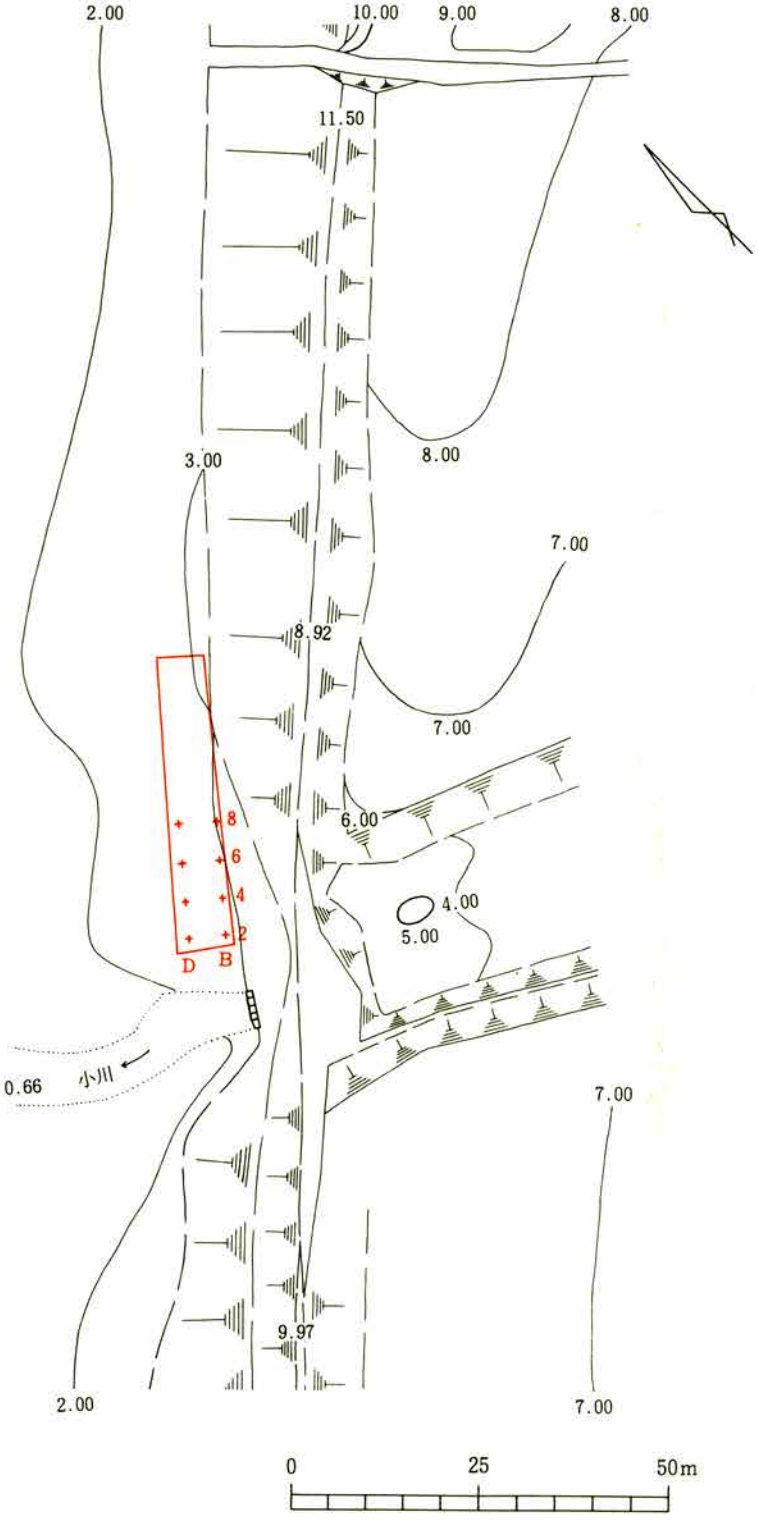
2　発掘調査区（第4図）

調査区は汀線に沿って砂丘上を通る自転車道と平行した道路基礎部にあたる汀線側の砂丘裾部に幅約7m、長さ約40m設定した。現地の標高は、各年、時節により一様でないが、調査時では2～3m前後であり、砂の堆積状況により異なる。また、時間、時節、天候により変化するが、波打ち際からは約30mの所にあたり、荒れ模様の天候となると波が打ち寄せて来る。

調査では、まず堆積した砂をバックホーで1～3m前後除去したが、調査区中央あたりから北東側は谷状に落ち込み、北東隅では標高マイナス60cmとなり、内陸側からの湧水、汀線側からの海水の流入と堆積砂の流れ込みが激しく、この部分に湧水を湛水し、中央部より南西側の調査区に2.5m四方のグリッドを設定した。各グリッドは南隅杭名を代表させて用いた。

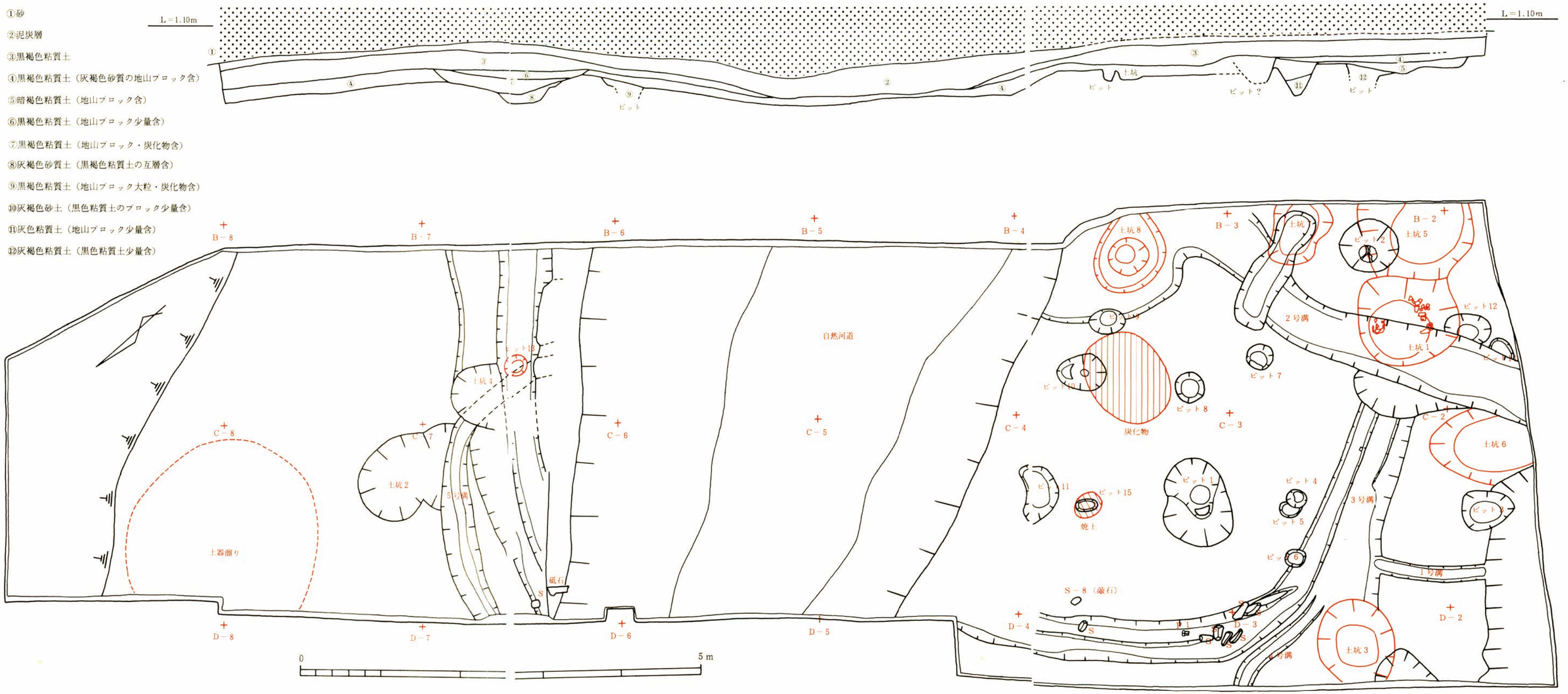
また、砂の堆積がかなり厚いため、調査区内に砂が崩れ落ちないよう、汀線側ではブルドザーで広くはね除けたが、砂丘側では砂丘上に自生するハマボウフウやコバン草などの植物も一緒に取り除くこととなり、植物の根で留められていた砂が崩れ落ちて来る心配があったため、砂丘の斜面に合わせて（砂丘裾部と頂部の比高差は約6～9m）緩やかな傾斜をつけて取り除いた。

調査区内は、その日の潮位によって違うが、ほぼ毎日湛水してしまい、朝方1～2時間の排水作業を必要とし、湧水については調査区隅3方に排水用の溝を設け、北東隅に流し込み調査時間内は常時ポンプアップして排水した。



第４図　発掘調査区位置図

①砂
②泥炭層
③黒褐色粘質土
④黒褐色粘質土（灰褐色砂質の地山ブロック含）
⑤暗褐色粘質土（地山ブロック含）
⑥黒褐色粘質土（地山ブロック少量含）
⑦黒褐色粘質土（地山ブロック・炭化物含）
⑧灰褐色砂質土（黒褐色粘質土の互層含）
⑨黒褐色粘質土（地山ブロック大粒・炭化物含）
⑩灰褐色砂土（黒色粘質土のブロック少量含）
⑪灰色粘質土（地山ブロック少量含）
⑫灰褐色粘質土（黒色粘質土少量含）



第5図　遺構全体図

Ⅲ　遺構と遺物

1　基本層序

調査区全体に見られる堆積層は、まず表土としての砂がある。この砂は冬期間には日本海の荒波によって流失し、それと一緒に包含層も年々削り取られているが、この削り取られた包含層が遺跡発見の端緒となっている[1]。現在ではテトラポットが海浜に敷設され、流失が幾分止められてはいるが、砂は春から秋にかけて堆積し、その年、時節により一様ではない。調査時には１～３ｍ前後堆積していた。

この砂の下に第２層として、草や木が泥炭状となって約10cm前後堆積しているが、調査区の自然河道内では中央部で約35cmと厚くなっている。この層はかなり硬く圧縮されており、層中の流木の断面はほとんどが楕円形に変形してしまっている。

第３層は黒褐色の粘質土で、この層より遺物を包含する。第４層も黒褐色粘質土の遺物包含層であり、第３層とは灰褐色砂質の地山ブロックを含むことにより区分され、第３層よりは砂質である。

第４層の下は灰褐色ないしは青灰白色の砂土で、一応、地山と考えている層である。灰褐色の層が青灰白色砂土のやや上部に堆積しているようで、灰褐色砂土は遺物包含層の可能性もあるが、極一部しか掘り下げていないため定かではない。

2　遺　構

遺構の概要

遺構としては住居跡１軒、溝状遺構５条、溝状の落ち込み（未完掘）１条、土坑８基、ピット19個ならびに自然河道１条を検出した。この他、Ｃ－７、Ｃ－８グリッド（以下全てグリッド省略）で土器が塊状に検出され、土器溜りと称した箇所も何らかの遺構となる可能性がある。

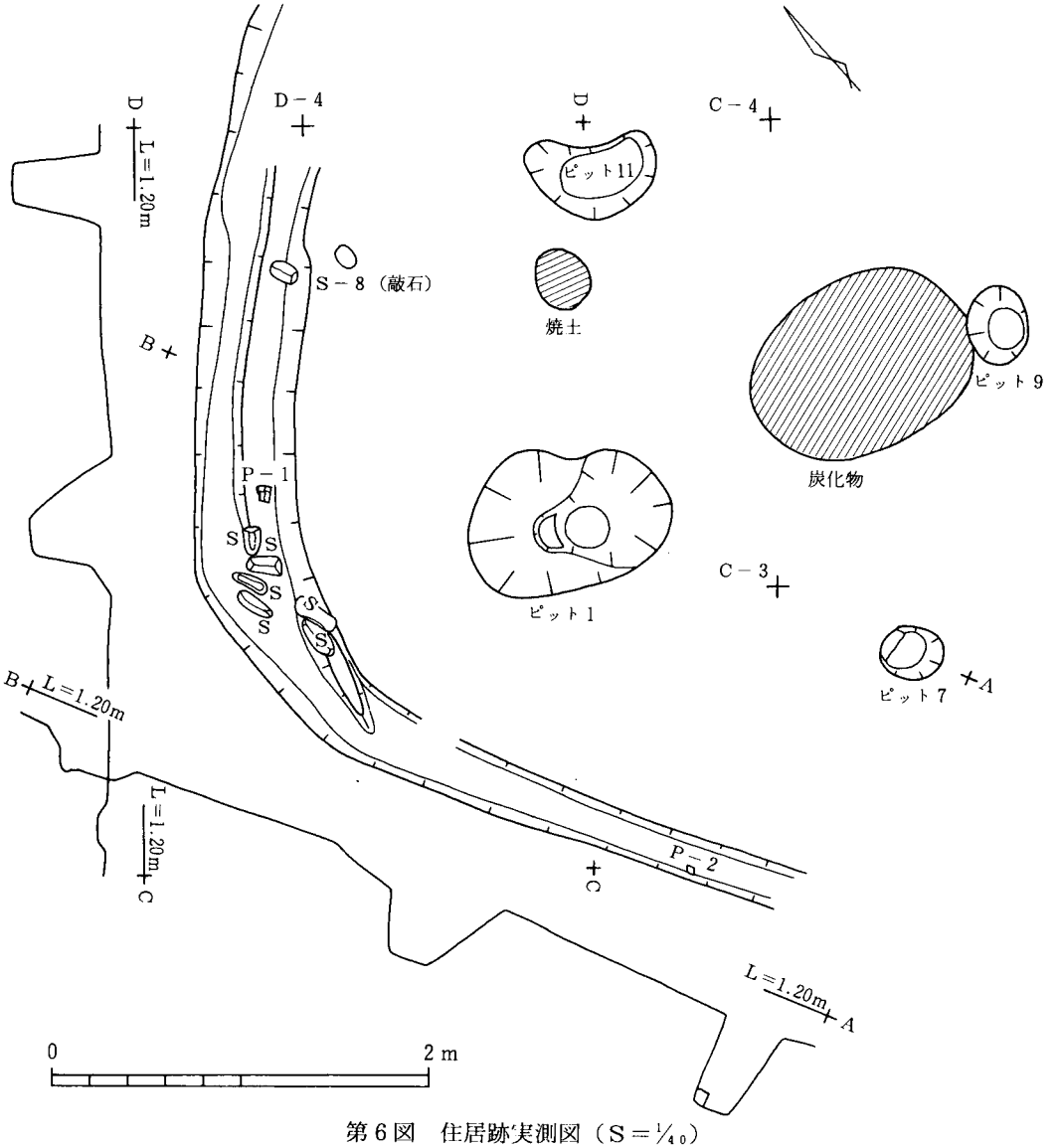
遺構は４層上面で検出できたもの、４層下面で検出されたもの、灰褐色ないしは青灰色の地山と考えられる面まで掘り下げて検出できたもの（第５図赤線）があり、何面かの生活面があると思われるが、波の侵触により包含層ならびに遺構面が削り取られた箇所も多いうえに極めて小範囲の調査区であったため、正確に捉らえることはできなかった。また遺構の切り合いも多く、当時整地が行なわれた様で、遺構内の遺物はほとんどが、かなりの時期幅を持ったものが混じり合って出土している。

このうち自然河道より南西側調査区の土坑は、灰白色ないしは青灰白色の地山面まで堀り下げてその輪郭がはっきりしたもので、概して古手の弥生土器が出土している。また、Ｂ－６・Ｃ－６で検出された溝状の落ち込みの底面となる灰白色の面から検出されたピット13からも弥生中期の土器が出土しており、この面が弥生中期頃の生活面となる可能性がある。

住居跡

壁溝ならびにほぼ床面を検出した段階で住居跡と確認できたもので、自然河道、２号溝に切られているため約４分の１程度の隅の部分しか残っていない。幅約20～30cmの壁溝を廻らし、柱穴らしきピット４個を検出しているが、配列からみて多角形の住居跡となる可能性があるが、溝の一部が二重になっており、拡張されていることも考えられる。

床面には炭化物の広がった面と焼土面が認められ、床面とほぼ等しい高さの壁溝底より浮いた状態で、長径約20～30cmの自然石（一部台石として使用された様なキズを持つ）６点が並べられた様に出土した。その他、敲石１点、剝片３点、若干の土器（この内甕形土器１点は口縁を床面に付け倒立した状態で胴部から上を削り取られた様に欠損し、もう１点の甕形土器は押し潰された状態で）が床面および壁溝内から出土している。



第６図　住居跡実測図（S＝1/40）

3遺　物

今調査では、パンケース25箱分の遺物が出土した。そのほとんどが土器で細片が多く、他に若干の石製品、炭化米等の自然遺物、金属器としては銅鏃1点がある。

(1) 金　属　器

銅　鏃（第7図－1）

厚さ2㎜、長さ24㎜を測る。摩滅が著しく、基部が有茎なのか無茎なのか定かでないが、茎部を欠損しているものと思われる。B－2第4層出土で所属時期は不明。

(2) 石　製　品

今調査により出土した石製品には、石鏃・石錐・楔形石器・磨石・敲石・台石・凹石・砥石・石核・剥片・砕片・管玉・玉未製品・針状石製品などがある。

石　鏃（第7図－2～5）

4点の石鏃が出土し全て輝石安山岩を用いている。2・4は実測面の細部調整痕は粗いが全面を覆い軸線をこえるものもある。裏面は主剥離面を中央部に大きく残し、縁辺のみの細部調整である。5は自然面と主剥離面を大きく残し、縁片のみに細かい細部調整を施すもので最も雑な造りである。これに対して3は、他の3点と比べて細身でその平面形は柳葉状を呈し、両面ともに細部調整は細かく全面を覆っており、丁寧な造りで2・4・5とは技術差が感じられる。

石　錐（第7図－6～8）

3点の石錐が出土しており全て輝石安山岩製である。6・8の基部は先行剥離面をそのまま残し、上端には自然面を残している。ともに加撃角度の高く粗い細部調整で縁辺、先端部を造り出している。6の先端部は欠損、8は使用痕としての摩滅が認められる。7は基部を欠損しているが、6・8と同様な造りで先端部はあまり鋭くない。

楔形石器（第7図－9～第8図－15・第11図－32）

8点出土しているが、9～15が輝石安山岩製で、32だけが砂岩質のものである。形態はやや正方形に近いもの（1・32）、縦に長いもの（10～13）、横に長いもの（14・15）があるが、楔という間接部材として使用された際の上下両方からの力によって折断されてしまったもの（11）や一部が欠損してしまったもの（15）など全てが使用後の姿であると思われ、概して不定形である。

10～12と15は上下両端に不規則な階段状の剥離痕が認められるもので、9は上端には小さな加撃痕、下端は不規則な階段状剥離痕とつぶれた縁辺が認められる。13は側縁、上端に自然面を残し、両面ともに大きな先行剥離面も残しており、石鏃等の素材、もしくはその素材を剥ぎ取った石核とも考えられるが、上端に小さな加撃痕、下端に不規則な階段状剥離痕が認められるため、楔として使用されたものと考える。14も上端に自然面を残し、先行剥離、主剥離も同一方向で翼状に造り出された縁辺の一部に階段状の剥離が認められ、その部分がつぶれて内湾している。また、上面の自然面には数箇所の加撃痕が認められる。

32は他のものと比べて大きく厚い。一方の側縁に細かな加撃痕を認め、どちらかと言えば敲石にちかい感じを受けるものであるが、上端の不規則で細かな剥離痕と下端の粗く大きな剥離痕は間接部材として使用された際のものと考えられるため、ここでは楔として取り扱ったが、敲石と

して使用されたことも間違いない代物である。

32を除く楔形石器は、後述する管玉などの擦切溝をもった石核や板状もしくは角柱状剝片の分割、截断の際に使用されたことが指摘されている。[2]

敲石・磨石（第11図－33～35）

ここでいう敲石・磨石とは台石、凹石としての機能も備えるものであり、図化した3点の他に数点出土している。33は砲弾形を呈し、全面を磨きあげ、上下両端、および中央部に加撃痕が認められる。特に下端は磨きによって尖頭を造り出しており、一点に力を集中させるための間接部材として使用された可能性のあるもので、硬い安山岩質のものである。34は石英質で下端の一部に加撃の痕跡が認められる他は磨石として使用されている。35も石英質で側縁全周と両面に加撃の痕跡が明瞭に認められ、片面の一部はかなり凹んでしまっている。

砥　石（第11図－36・37、図版19－d）

37と図版19－dは石皿状を呈し、中央部付近で割れたものである。37は砂岩質で両面とも使用されており、粗い擦痕が認められる。dは長径約25cmを測る硬質の石で片面だけの使用であるが、使用面はかなり滑らかに磨きあげられている。36は軽石製である。本遺跡からは大小様々（長径1～20cm）な多量の軽石が出土しており、何かを磨いたと考えられる面を持つものが若干ある（図版第19－a～cなど）。36は何かを磨いた面とともに切り込み痕が認められ、その痕跡は深いものから浅いものまであり一様ではない。何かの刃部を磨いたものと考えられるが定かでない。

管玉・玉未製品（第9図－16～第10図－28・30・31）

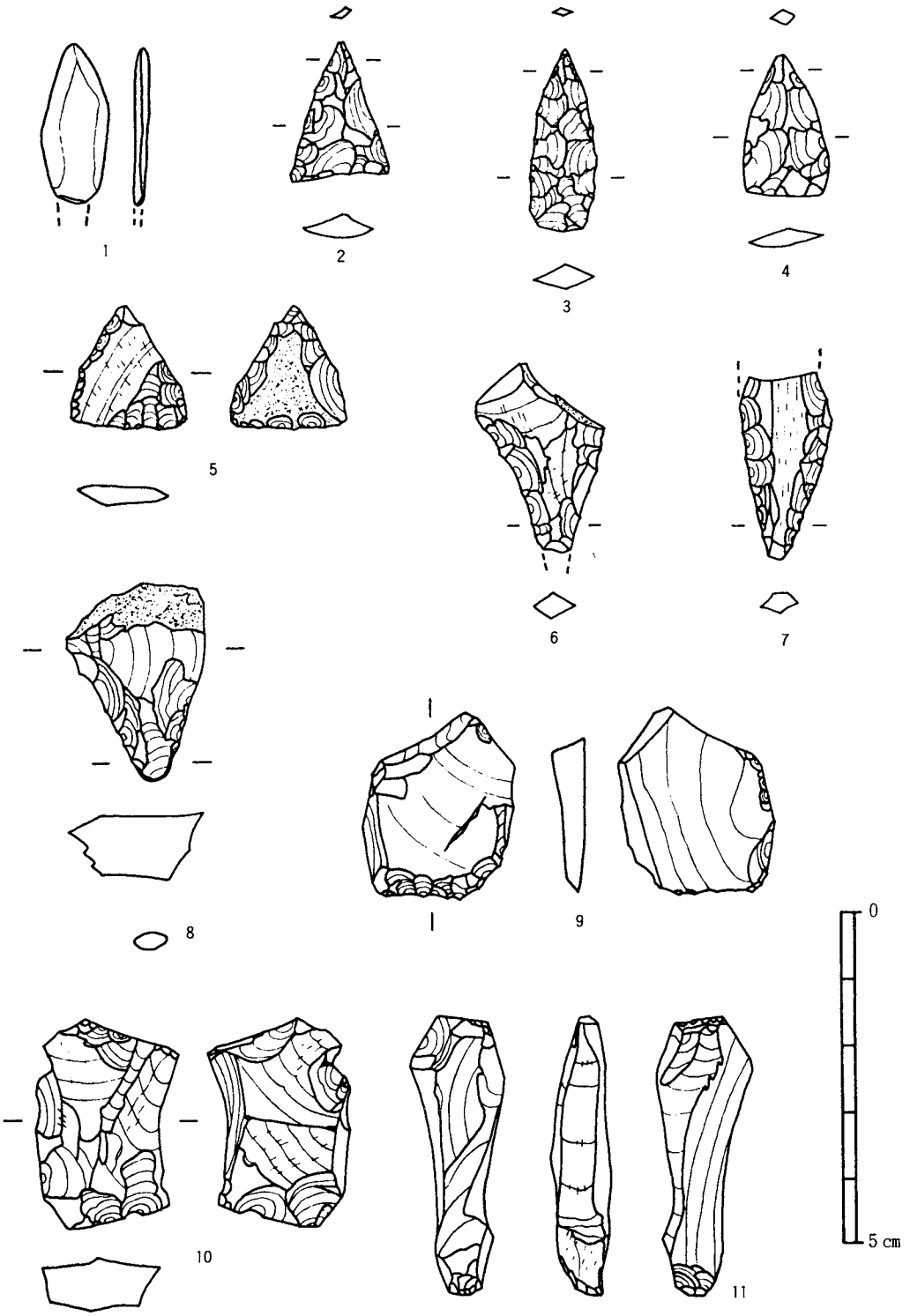
全て緑色のフリント質で硬い石材であるが、極一部に軟らかい部分もみられる。また、図化しなかったが、不定形な剝片・砕片も十数点出土しており、概してやや軟らかい石材のものに不定形な剝片がみられる。22～24は不定形なものの代表例である。16～18は自然面を残す石核で、16・17には1条の18には2条の擦切溝が施され、ともに溝中央部より截断されており、前述の楔形石器がその際使用されたことが窺える。19～21は自然面をもたない石核で、19は3箇所、20・21は1箇所に擦切溝の痕跡を残している。25～28は擦切溝をもった板状もしくは角柱状の剝片で、4点ともに1条の擦切溝が施され、溝中央部より截断されており、裁断の方向から言えば横長の剝片となる。[3] 26は横に長い面のうち3面に、25は、1面に磨きが施されているが、截断との前後関係は不明である。

30は経3㎜、長さ7㎜、31は経3.1㎜、長さ5㎜の管玉の製品である。穿孔された穴は31の方がやや太く、ともに片面からの穿孔である。

針状石製品（第10図－29）

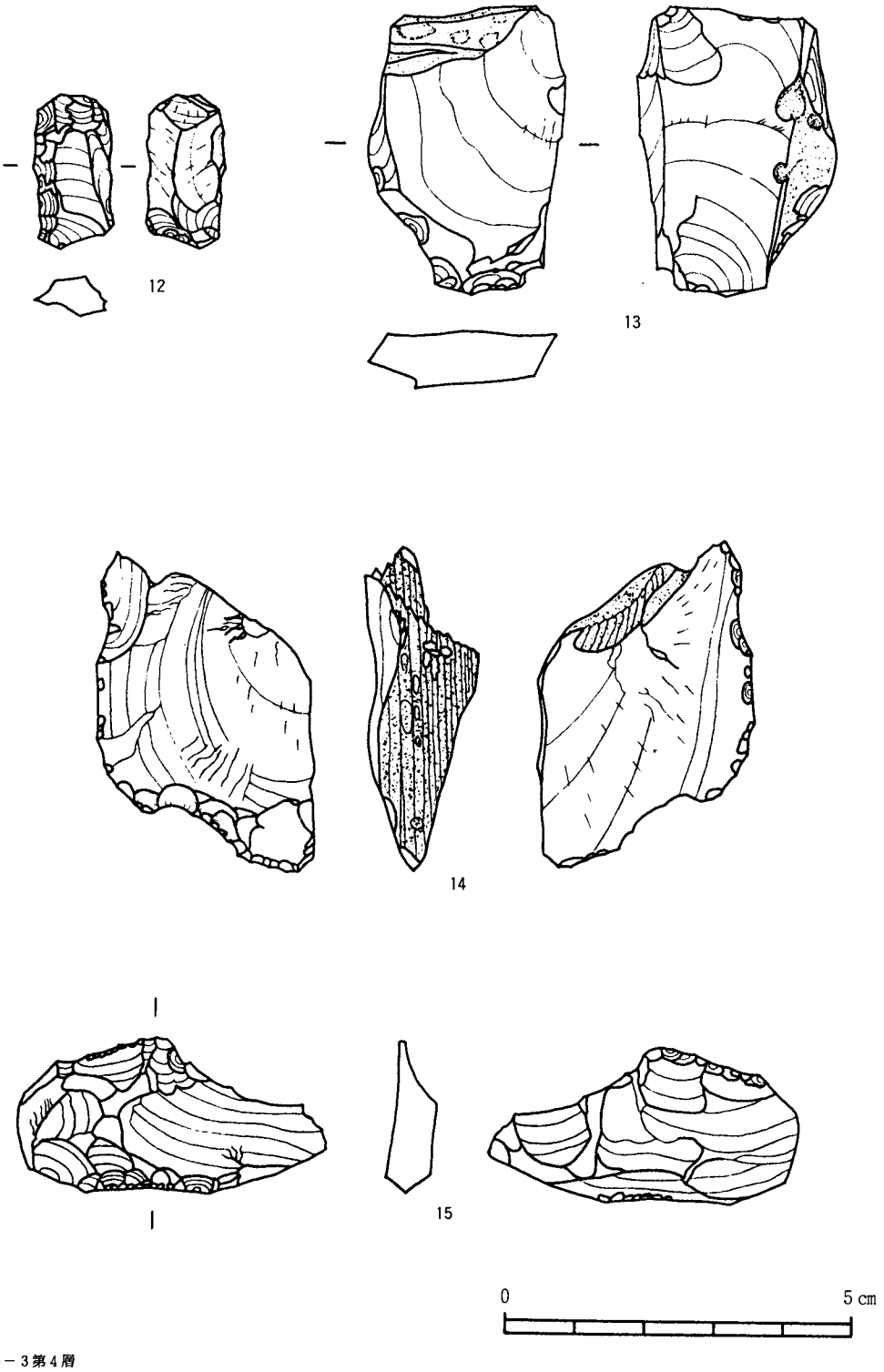
石材は不明。経1～1.2㎜で長さ15㎜を測るが、途中で折れている可能性もある。この石製品は管玉等の穴の穿孔具としての機能をもつものと考えられている。[4]

各石製品はここで一括して取り扱っているが、それぞれ出土地点が異なり、遺構内出土のものも流れ込みの可能性があるため所属時期は不明である。このうち管玉や玉未製品と楔形石器は密接な関係のあるもので、同時期の所産と考えられ、石鏃については、主剝離面や自然面を大きく残すものが、楔形石器の調整の際に生じた剝片を利用している可能性があるため、玉造りに輝石



1　B－2第4層　　4　C－6第3層　　7　地区不明　　10　B－6第3層
2　Dライン排水溝　　5　C－7第4層　　8　C－7第4層　　11　C－6第4層
3　B－7第4層　　6　B－6第3層　　9　C－8土器溜り

第7図　銅鏃・石鏃・石錐・楔形石器実測図（S＝1/1）



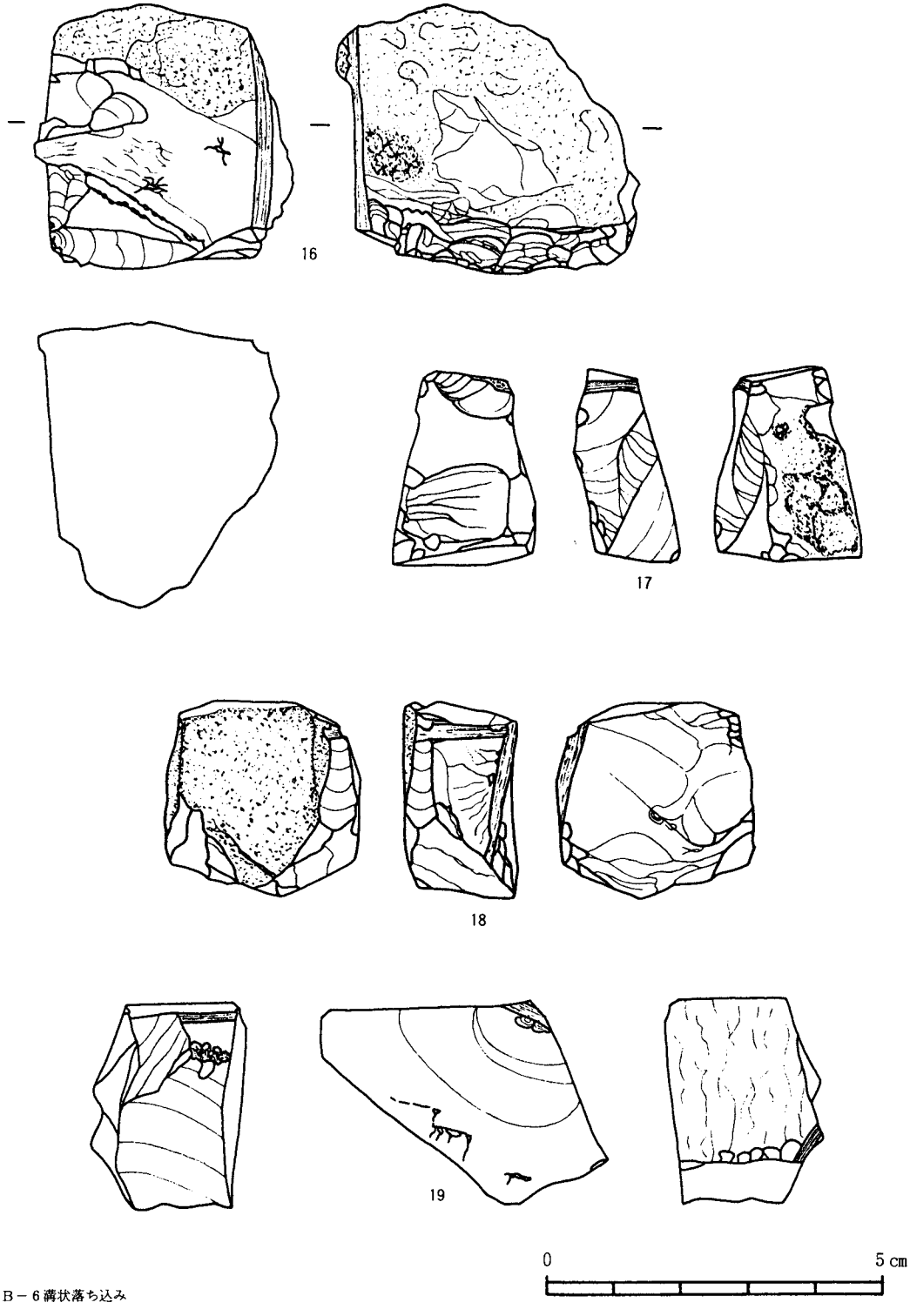
12　D－3第4層

13　土坑6覆土

14　C－7第4層

15　C－8土器溜り

第8図　楔形石器実測図（S＝1/1）



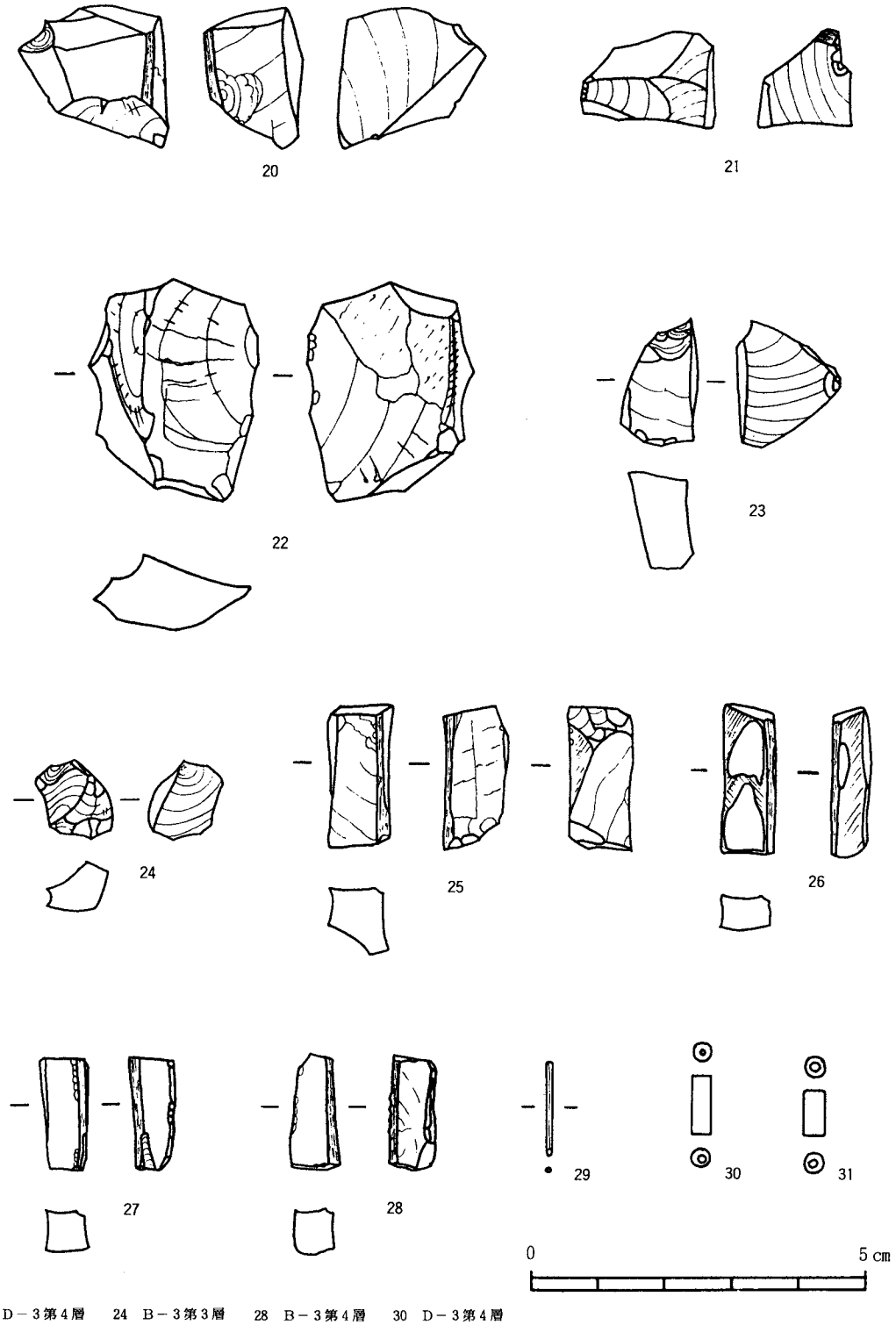
16　B－6溝状落ち込み

17　C－7第4層

18　土坑6覆土

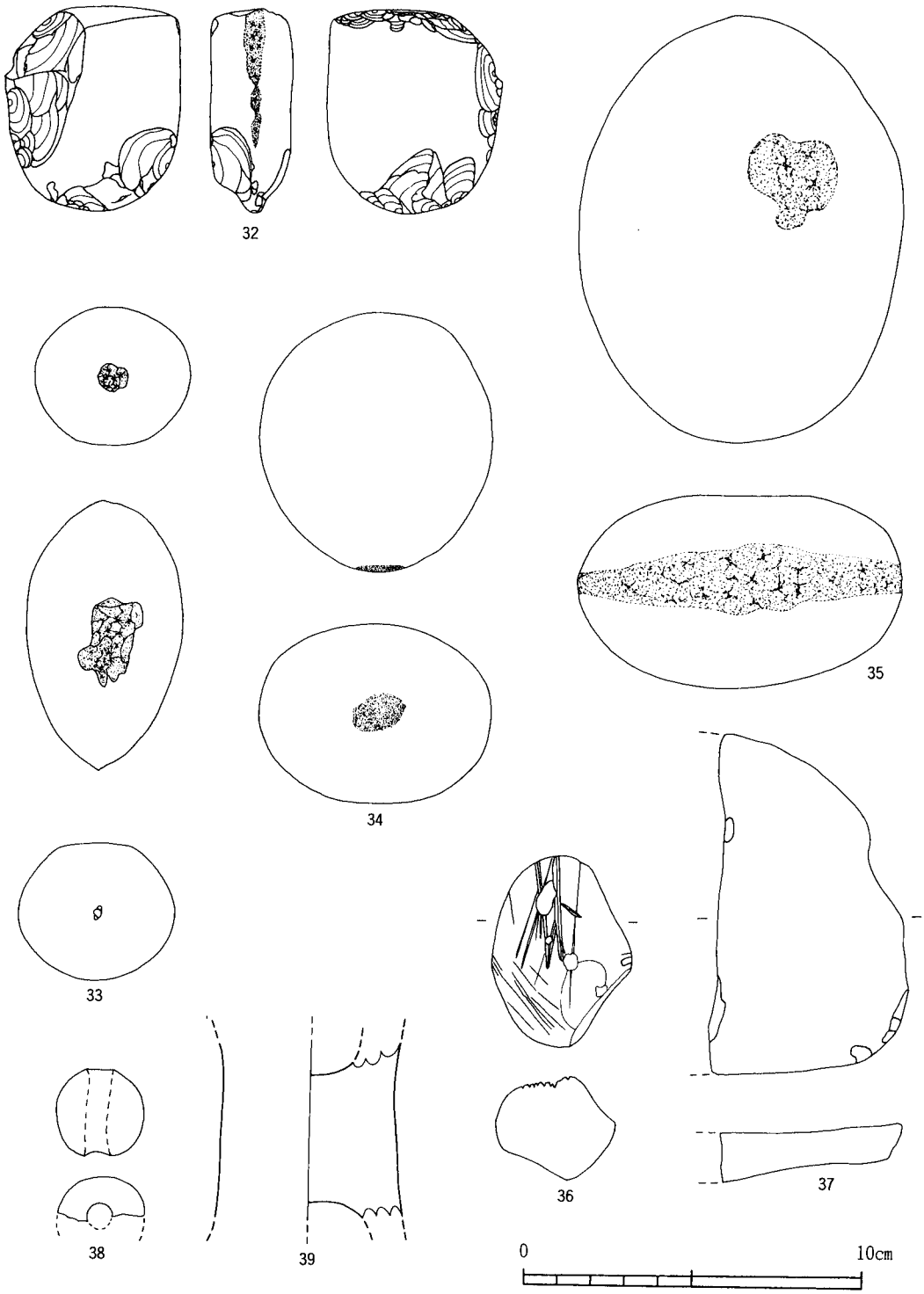
19　C－8サブトレンチ

第9図　玉石核実測図（S＝1/1）



20　D－3第4層　24　B－3第3層　28　B－3第4層　30　D－3第4層
21　C－7第4層　25　C－7第4層　29　B－3第4層　31　C－4第4層
22　C－7第4層　26　B－6第3層
23　B－6第3層　27　B－3第4層

第10図　管玉・玉石核・剥片・砕片・針状石製品実測図（S＝1/1）



32　B－7第4層　　36　C－8 土器溜り
33　C－7 土器溜り　　37　C－6第3層
34　ピット5　　38　C－6第4層
35　住居跡S－8　　39　D－3第4層

第11図　楔形石器・敲石・磨石・砥石・土製品実測図（S＝½）

安山岩の楔が用いられなくなるまで存在するものと考えられる。

(3) 土　製　品

土　錘（第11図－38）

真っ二つに割れた欠損品ではあるが、径約26㎜、孔径約８㎜を測る球形の管状土錘である。Ｃ－６包含層出土で所属時期は不明。

不明土製品（第11図－39）

現存高5.3㎝、最大径７㎝を測る土器の脚台部、あるいは支脚と考えられるものであるが、破損、摩滅が著しく定かでない。

土器溜りの土器（第12図－１～第17図－65）

Ｃ－７・Ｃ－８で塊状に出土した土器を土器溜りの土器と称するが、Ｂ－７・Ｂ－８包含層出土のもと接合するものもある。出土した土器の器種は甕形土器が最も多く、若干の壺形土器、高杯形土器、器台形土器、結合器台形土器、蓋形土器、鉢形土器、小型土器等がある。また、弥生時代中期から後期（法仏式期）の細片（65など）も少量出土している。

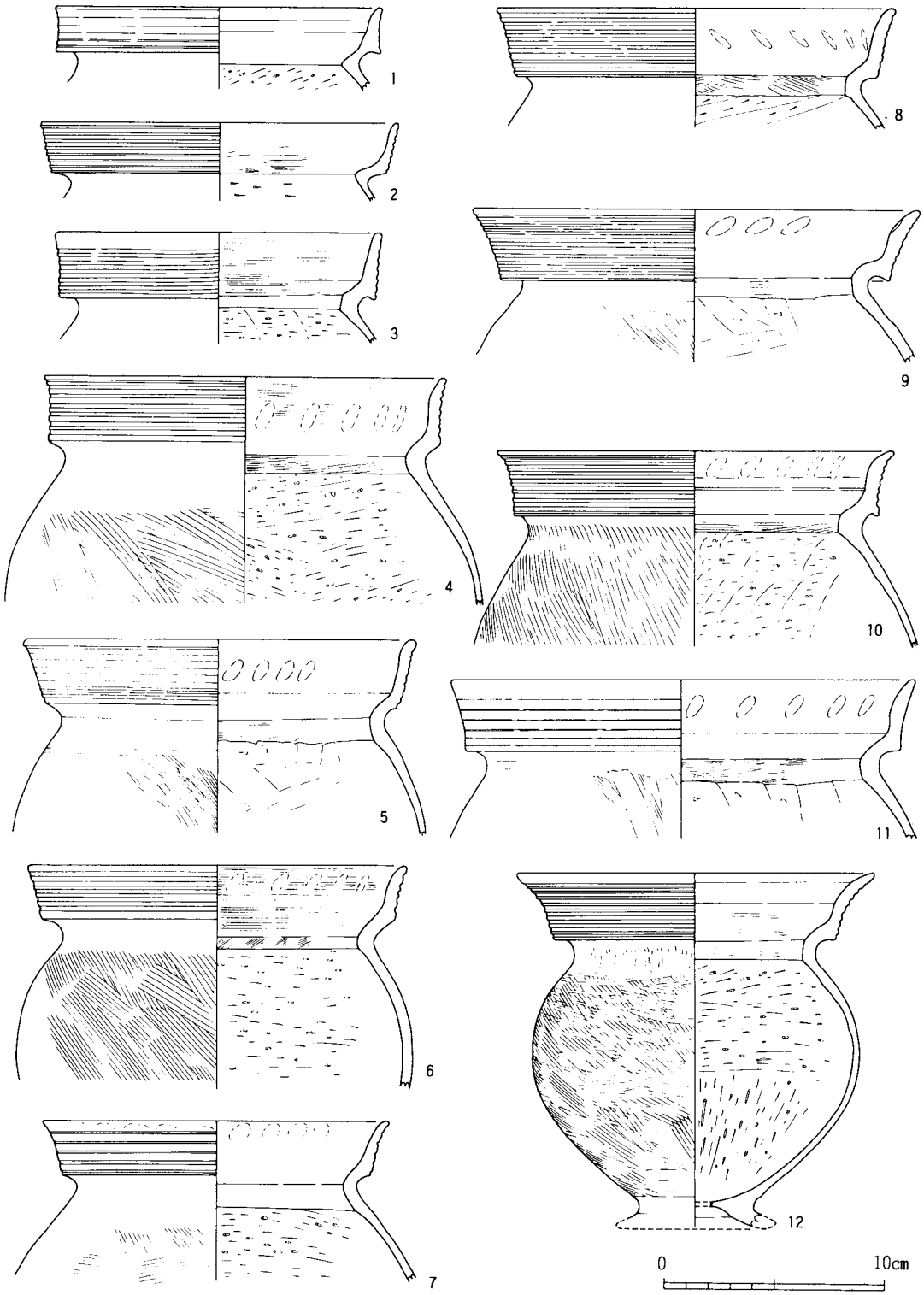
甕形土器は出土土器の過半数以上を占める器種であるが、その全姿を窺い得る資料はほとんどなく、口縁形態からみると、擬凹線有段口縁（１～24）が大部分を占め、次いで無文有段口縁（25～30）、極く少量、口唇部に粘土を貼付して幅狭い口縁帯を作り出す31や、口唇部に押圧を加えて面を作り出す「能登系甕」と称されるもの（32・33）の他、34のような「く」の字状口縁が認められる。

擬凹線有段口縁甕は、法量的に口径15㎝前後、20㎝前後、30㎝前後に３大別でき、20㎝前後のものが最も多いが、口径の方が胴径より大きい13・21などや、器高、全形のわかるものがないため、内容量的には不明確である。調整方法は胴部外面は斜方向のハケ調整、内面下半は螺旋状の縦方向、上半部は斜方向ないしは横方向のヘラケズリ調整を基本としているが、12のような台付のものでは、口縁内面と外面肩部から胴部上半にナデ調整、ハケ調整の後、極めて細かい「ミガキ状」の調整を施している。14も同様な「ミガキ状」の調整を施すもので、口縁部外面の一部はその「ミガキ」状の調整により擬凹線が潰れている。

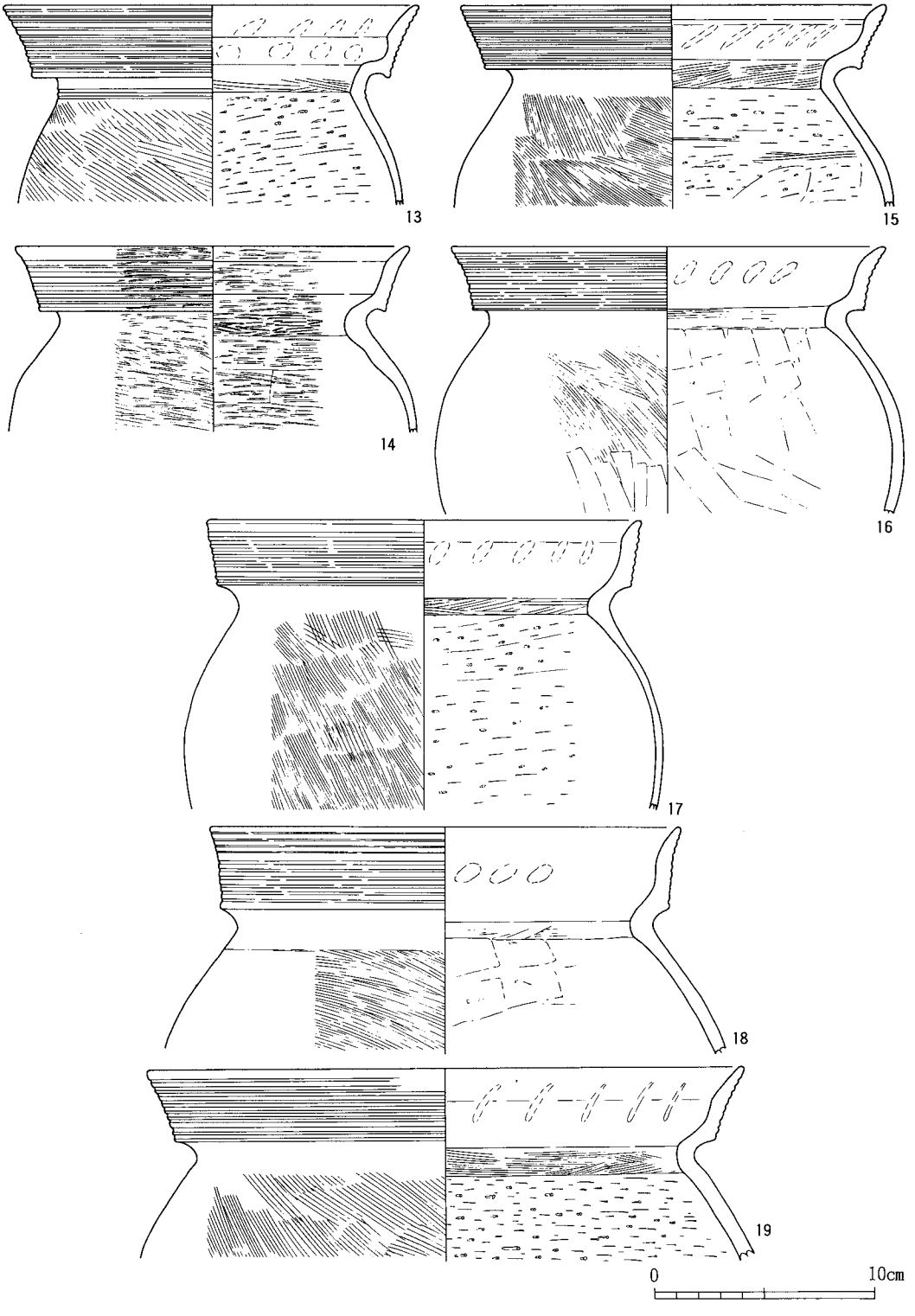
これら擬凹線有段口縁甕は、口縁部の形態や作りから細分類が可能であるが、全形のわかるものが量的に少ないため分類を行なっておらず、直立する幅狭い口縁帯に擬凹線４条を施し、口縁部内面には指頭圧痕を留めず、頸部内面は丁寧なケズリ調整が施され面をもたない１が最も古相を示すものであろうことしか挙げることができない。

無文有段口縁甕は、擬凹線有段口縁甕以上に口縁形態差が著しい。27は有段口縁の屈曲部外面が外下方に突出し、明瞭な稜をなすもので「山陰系甕」に近いもので、擬凹線有段口縁甕にも９・10・13～15のようにやや突出気味に作り出すものもあるが、27ほど明瞭なものはない。

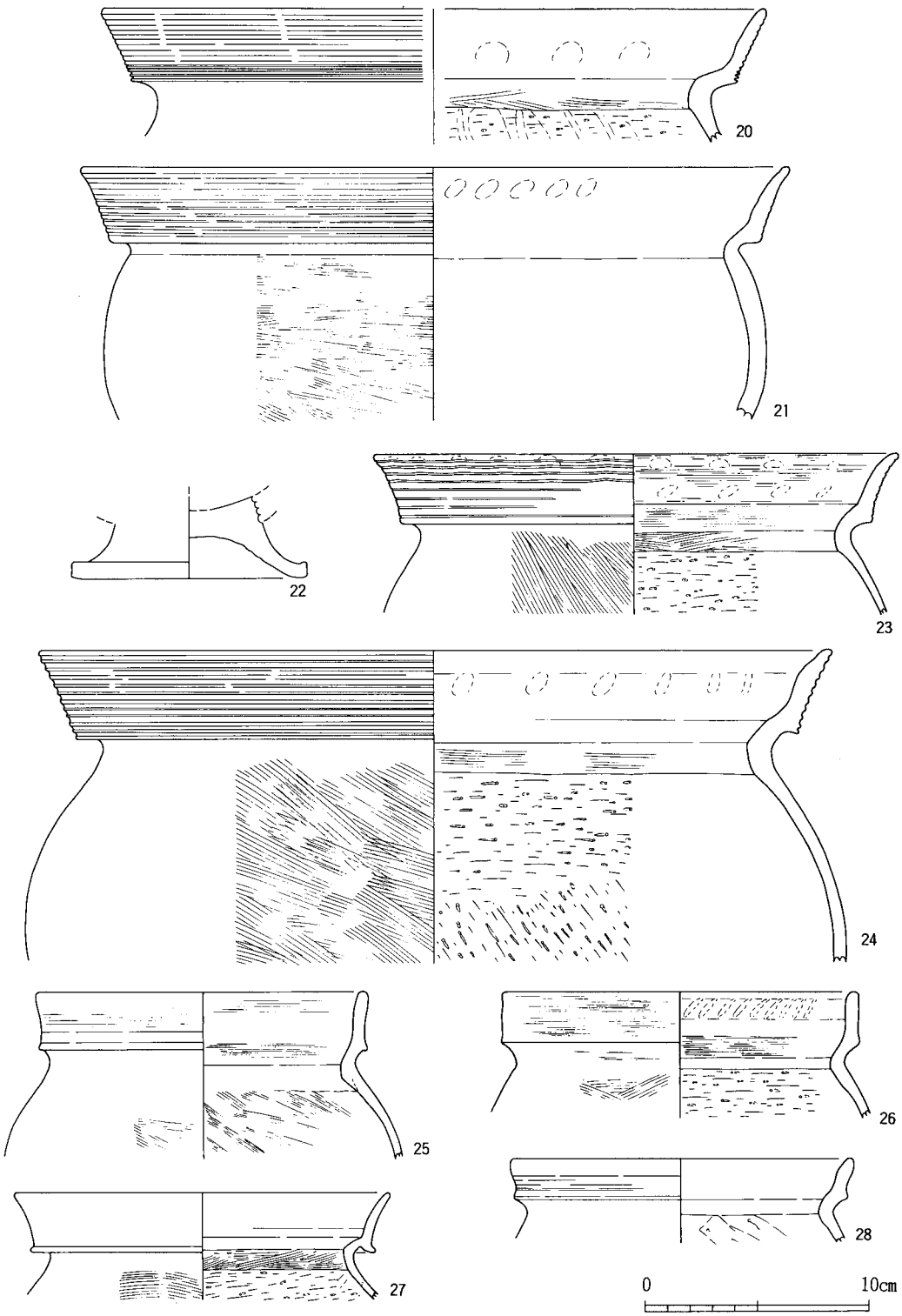
壺形土器には有段口縁のものと「く」の字状口縁のものがある。有段口縁のものは擬凹線を施すもの（35・37・38）と施さないもの（36・39～42）がある。また、「ハ」の字状の頸部をもち体部との境いの明瞭なもの（35・36）極く短い頸部をもつもの（38・40・41）内面が「く」の字状をなすもの（39・42）など形態差は著しい。このうち35と44を除いて作りは丁寧である。38は胴



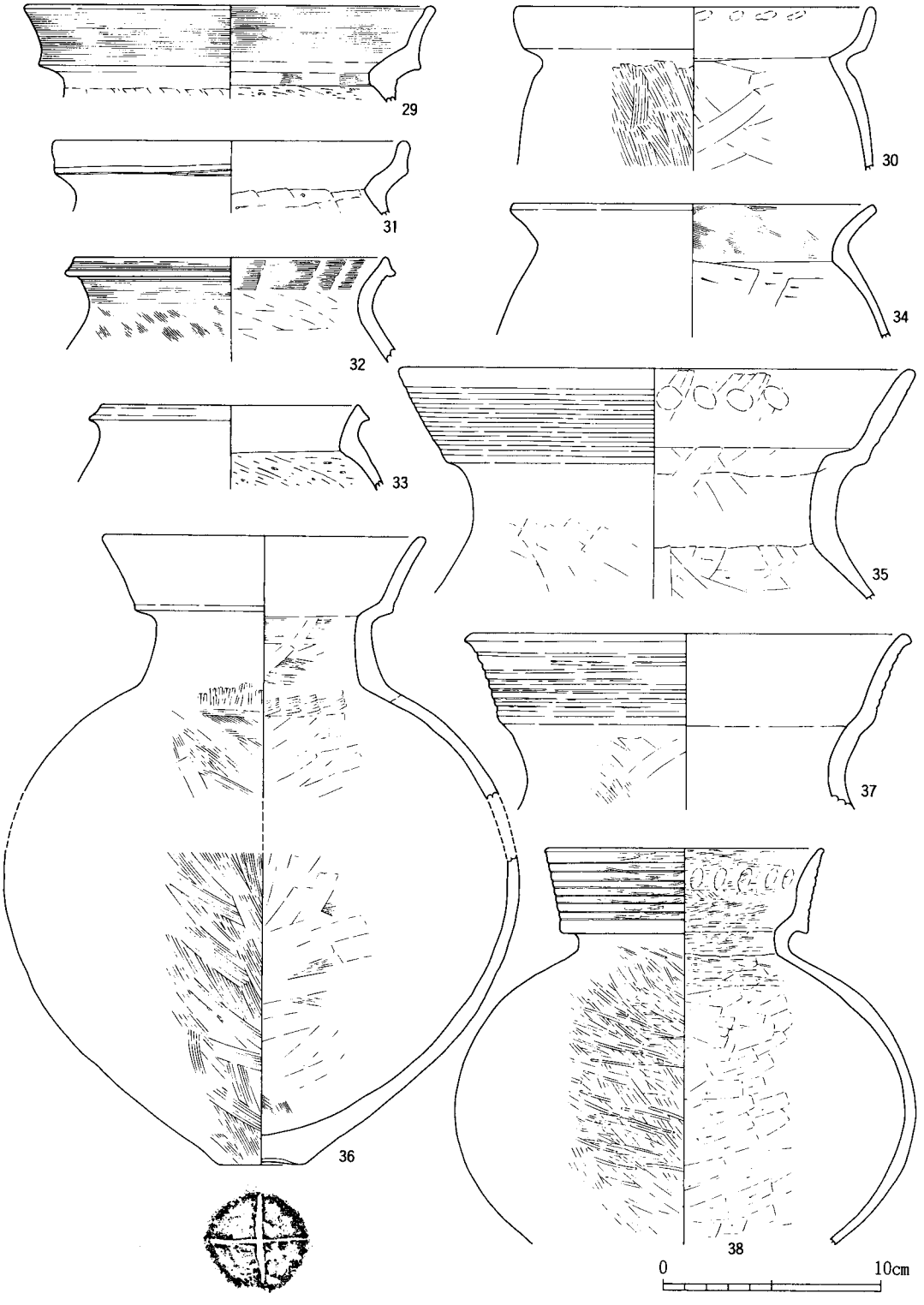
第12図　土器溜り出土土器実測図（S＝⅓）



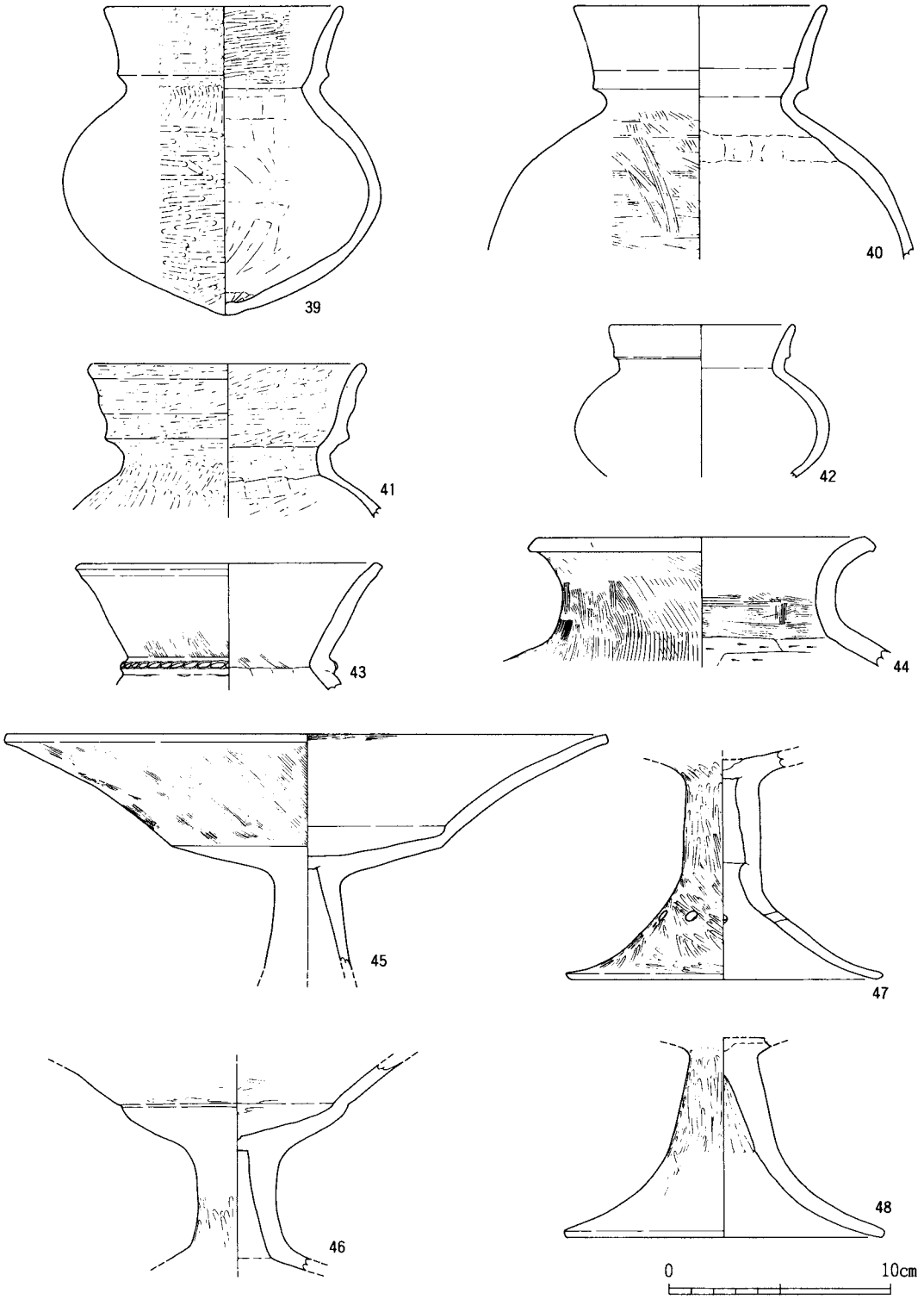
第13図　土器溜り出土土器実測図（S＝⅓）



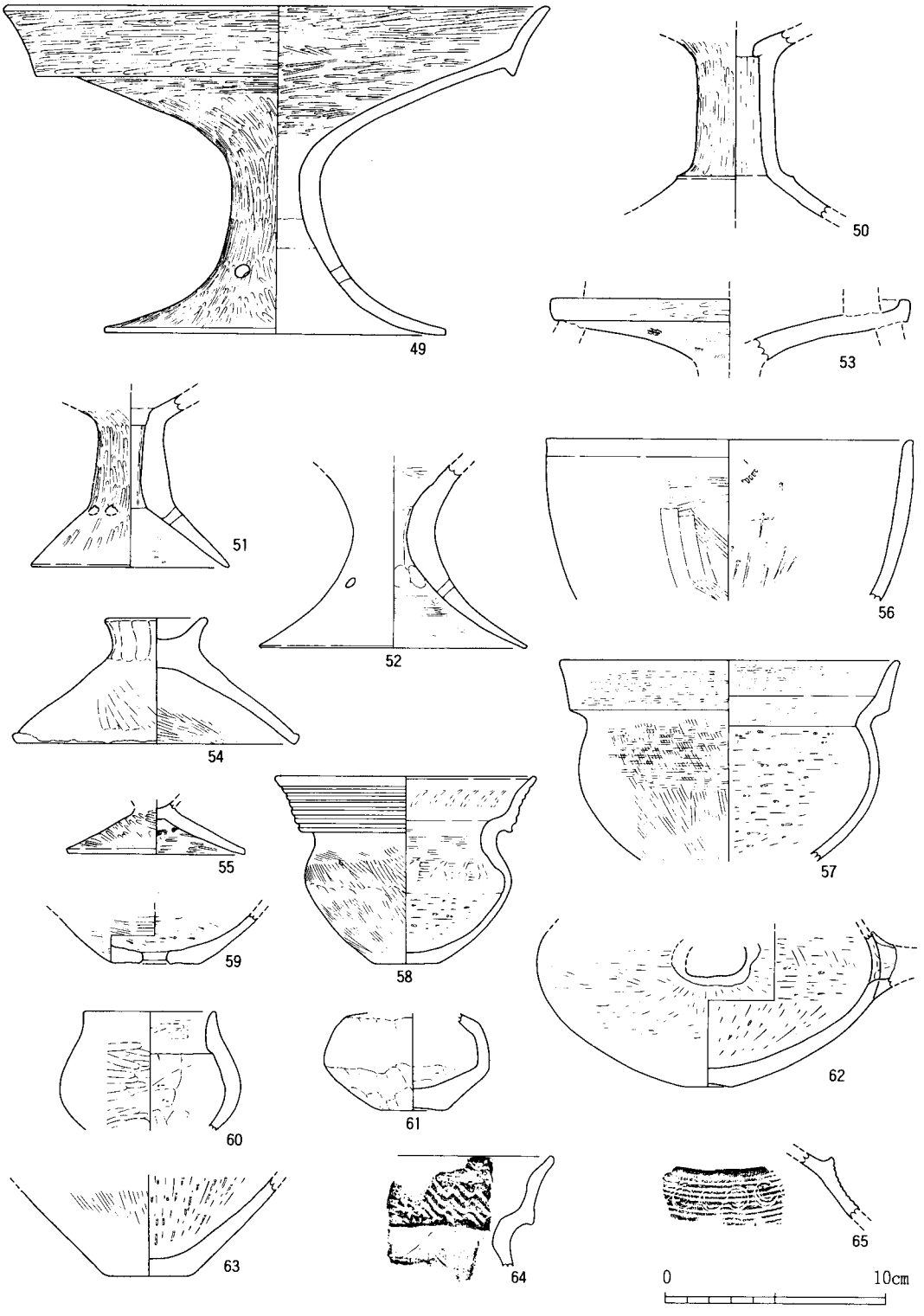
第14図　土器溜り出土土器実測図（S＝1/3）



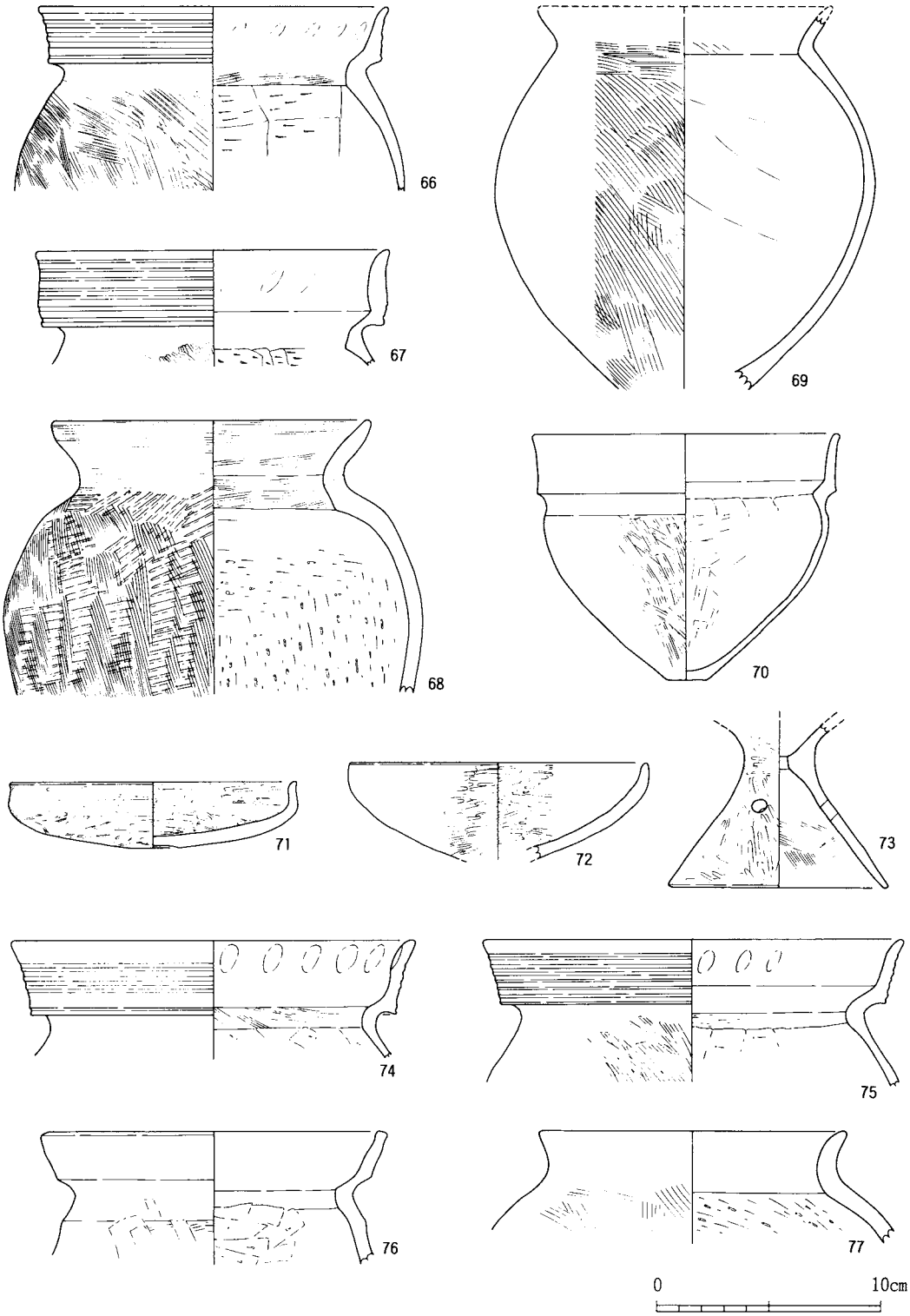
第15図　土器溜り出土土器実測図（S＝⅓）



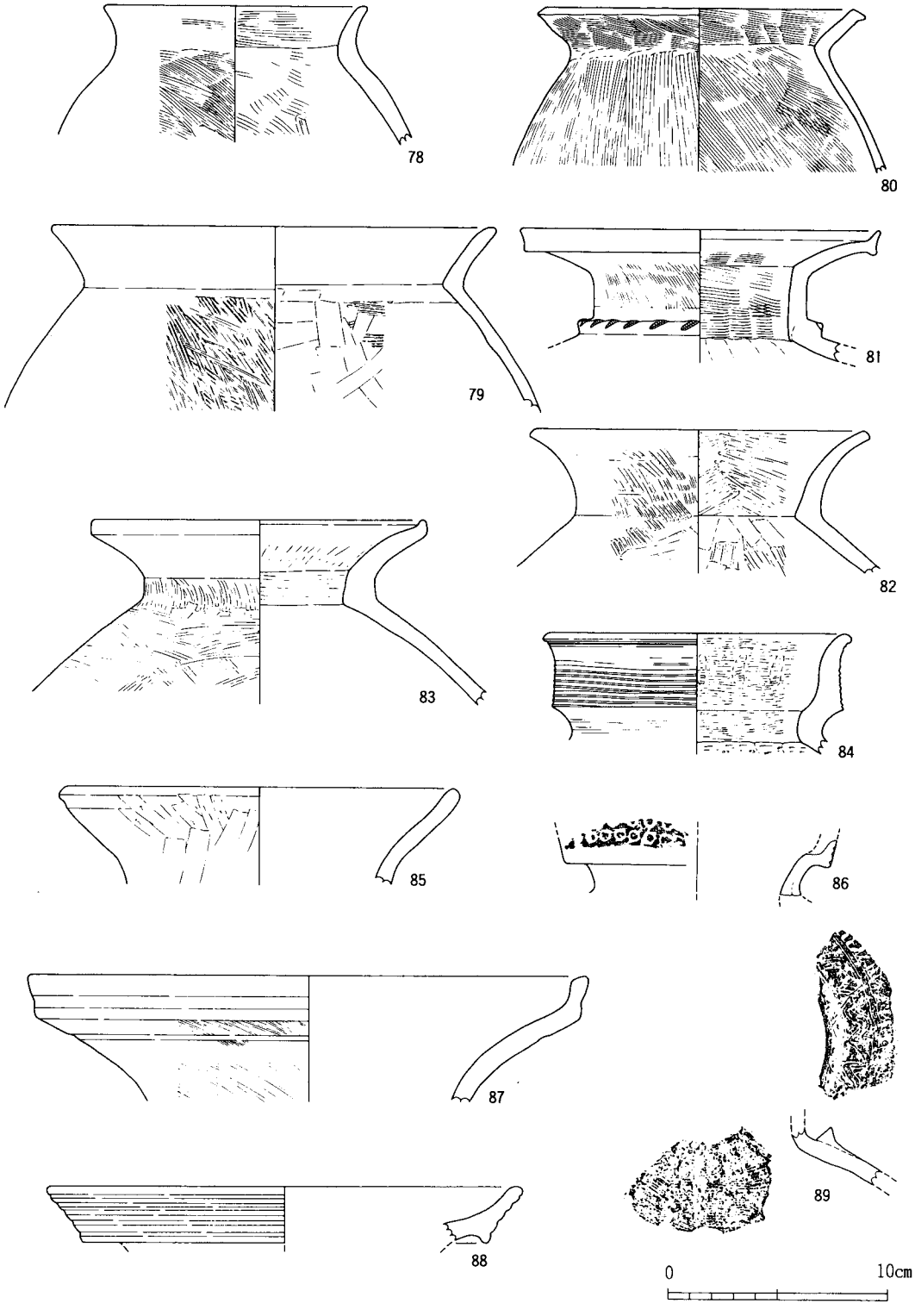
第16図　土器溜り出土土器実測図（S＝⅓）



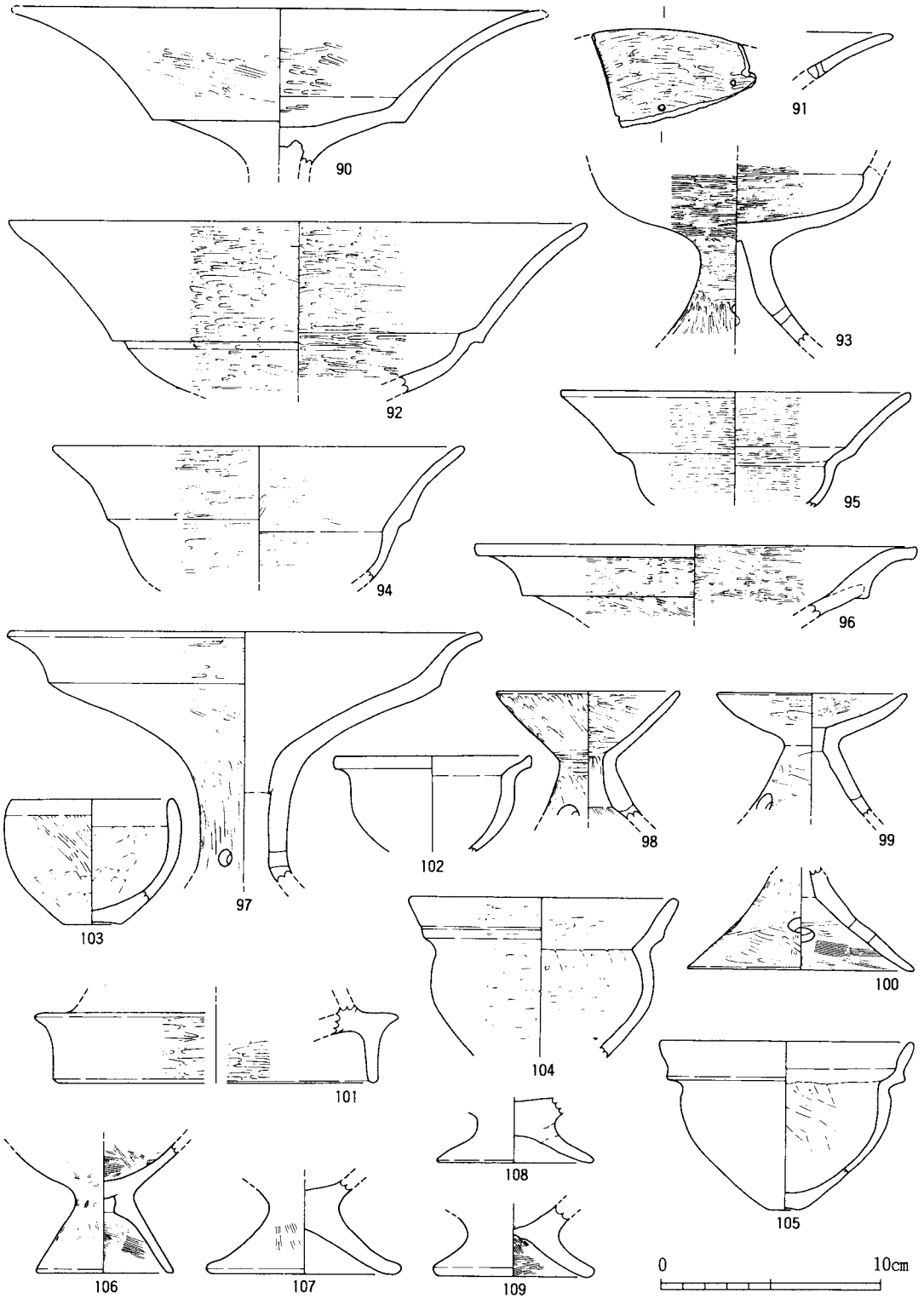
第17図　土器溜り出土土器実測図（S＝⅓）



第18図　住居跡出土土器・各グリッド出土土器実測図（S＝⅓）



第19図　各グリッド出土土器実測図（S＝⅓）



第20図　各グリッド出土土器実測図（S＝⅓）

部最大径が中央部にある球形の胴部に短い頸部をもち、直立気味に立ち上がり口縁端部ちかくで先細り気味に外反する口縁部外面に擬凹線を施し、内面に指頭圧痕を留めるもので、前述で甕形土器12・14と同様な極めて細かい「ミガキ状」の調整が施されており14と同じ様に擬凹線が潰れてしまっている。

高杯形土器は杯部は屈曲するが内面にしか段をもたないもの（45）と、内湾する杯部が内外面ともに段をもって屈曲し、外反気味にのびるもの（46）が認められる。脚部は柱状部が鋭く屈曲し裾部に広がるもの（46）、柱状部から緩やかに外反気味に裾部が広がるもの（48）と両者の中間的なもの（47）がある。

器台形土器は受部が屈曲し、屈曲部外面に下稜をもち、受部内面と器外面に丁寧なミガキ調整を施した49や、脚部と受部・裾部との境界が不明瞭で、受部・裾部ともに外反気味に大きく開く52の他は全形を窺い知るものはない。

結合器台形土器は小片のため図化し得るものはほとんどなく、53の他に垂下帯部分などが３点出土している。

蓋形土器は紐頂部が凹み環状を呈し、体部が内湾気味に開く54と体部がやや外反気味に開き器内外面に赤彩を施す55が出土している。

鉢形土器口逆円錐形を呈すると思われる56の他、有段口縁系甕を小型化したもの（57・58）がある。57は無文有段口縁甕の口縁部と同様な口縁形であるが、口径が胴部最大径より大きく、また、口径が器高を大きく上回るもので、内外面ともに口縁部、胴部上半にミガキ調整が施されている。58は擬凹線有段口縁甕と同じ口縁形で手法もほぼ同一であるが、口径が胴部最大径および器高を上回るもので、胴部中央内面に接合痕としての指頭圧痕を留めている。

この両者については小型甕と呼ぶべきものかも知れない。また、甕形土器として紹介した12も口径が胴径を上回り、器高も台部を除けば小さいものであり、21も口径が胴径を上回りその形状からみて口径が器高を大きく上回ると考えられるうえ、胎土、器面の状態から22の脚台部が同一個体と考えられるもので、台付の鉢形土器の大型品と考えられ、このようにミガキを施すなり、脚台部を附すなり意識的に作り分けているものがある。これらを甕形土器の細別形態とみるか別の器種とみるかは今後の類例に待ちたい。

その他、全く特異な器種として注口状土器（65）１点が出土している。

これら土器溜りの土器は、各器種の形態や外来系の土器をほとんど含まない点から月影Ⅱ式[5]に比定できるであろう。

住居跡出土の土器（第18図－66～73）

床面まで堀り下げて住居跡と確認できたもので、覆土の観察ができておらず、一括遺物として取り挙げるには難点があるが、住居床面直上のものと壁溝内出土のものを一応一括品として記載した。

甕形土器は66・68・69が床面直上から、67が壁溝内から出土している。66・67は擬凹線有段口縁甕で66は外反気味の口縁が端部で先細りして外傾するもので、67は、内湾気味に直立する口縁の端部だけが外反するもので、内面に強い屈曲と頸部と胴部の境いに鋭い稜をもつもので、両者

ともに土器溜りの擬凹線有段口縁甕とは異質な感じを受けるものである。68は肩の張った胴部に境界の不明瞭な口縁部が外傾して鈍くのびるもので、体部外面には粗いタタキ調整が施され、その上から粗いハケ調整が加えられたものである。

鉢形土器（70～72）は全て壁溝からやや浮いた状態で出土している。70の口縁形は無文有段口縁甕に似るが、胴部最大径が口縁部直下にあり逆円錐形状に窄まり小さな平底をもつ。71・72は内外面ともに丁寧なミガキ調整が施され、内湾する体部を持ち、口縁部ちかくで屈曲する71と口縁端部だけがわずかに屈曲する72がある。

小型器台形土器73は、甕形土器68と一塊りとなって出土したもので、脚部と受け部・裾部との境いが明瞭でなく、受け部は内湾気味に小さく開くようであるが、上半を欠損しているため定かでない。

以上住居内出土の土器はタタキ調整を施すものの存在や、小型器台の存在から土器群の土器より降る時期のものであろう。

包含層出土土器（第18図－74～第20図－109）

包含層中より出土した土器には弥生中期に溯れるものから古府クルビ式期に降るものまで存在するが、月影式期のものと白江式期[6]のものが中心である。これらの土器については詳細な検討を行な得なかったため実測可能なものを掲げておく。

注

(1) 橋本澄夫・荒木繁行「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」『石川考古学研究会々誌』第18号　石川考古学研究会　1975年

(2) 佐藤則之・齊藤基生「3．玉作の工具」『北陸自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書　下谷内遺跡』　新潟県教育委員会　1979年

(3) 註(2)文献の「4．玉作りの手順」

(4) 註(2)文献

(5) 田嶋明人　「Ⅳ　考　察　－漆町遺跡出土土器の編年的考察－」『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター　1986年

(6) 註(5)文献

引用・参考文献

・ 三浦純夫、芝田　悟、栃木英道、他『近岡遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1986年

・ 出越茂和・楠　正勝　『金沢市近岡ナカシマ遺跡』　金沢市教育委員会　1986年

・ 吉岡康暢・小嶋芳孝・他『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　石川県教育委員会　1976年

・ 中島俊一『辰口町・高座遺跡発掘調査報告書』　石川県教育委員会　1978年

・ 吉田　淳『御経塚ツカダ遺跡(御経塚Ｂ遺跡)発掘調査報告書Ⅰ』　石川県野々市町教育委員会　1984年

・ 栃木英道・湯尻修平・他『吉竹遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1987年

・ 『シンポジウム「月影式」土器について』報告編・資料編　石川考古学研究会　1986年

弥生土器・その他

弥生土器（第21・第22図１～15）

壺形土器（21-1～12、22-1～４）のうち第20図１と４が直口壺系であるがそれ以外は広口壺系ないしはその他の系統のものである。１はやや縦長の体部を有しなだらかな頸部からやや外反気味に内傾する口縁にいたる。全体にハケ調整が施されているが外面にはヘラミガキが粗くみられる。胎土中にシャモットがかなり混入し注目できる。４は受口様に口縁を張り出させている。

２は水平に突出して幅広の面を持つ口縁で、上下端にヘラ先による刻み目がある。３は緩やかに外反する口縁の端部に指によって波状の口縁端部をもつ。非常に精選された胎土である。５・８は短頸壺系で締りの悪い頸部から外反気味に口縁にいたる。５では口縁端部に格子状の刻み目文があり、内面には縦方向の波状文がある。頸部以下には直線文と簾状文が交互に施文されている。ともに文様は稚拙で回転台等の器具を使用して施文していない。文様は向かって右から左方向に施されている。なお外面に煤が付着している。

７は大型の壺である。幅広の突帯状の口縁をもち、そこに斜めのヘラおよびハケによる刻み目がある。なお、22－４は口縁端部近くに櫛による綾杉状の刻み目がある。

壺に施された文様は櫛状工具による直線文・波状文・簾状文があり、ヘラ先による刻み目がある。櫛描文のうち回転運動を利用しているもの（22－１・２等）としていないものがあり、またハケと同一原体と思われるようなものも少なくない。施文部位は口縁端部と体部上半に限られるようである。

第22図５～15は甕形土器である。小破片なので甕以外の土器も一括しているかもしれない。14が受口状である他は「く」字状の一般的な口縁形態である。

10～12は端部を指による押圧によって小さな波状に作り出し、内外面には粗いハケが施されている。いずれもあまり頸の締らないタイプであろう。６・７の口縁は大きく屈曲し端面にはヘラによる刻み目がみられる。おそらく倒鐘形の体部をもつと考えられる。９もほぼ同じであるが若干体部が張るものであろう。13・15の内面にはそれぞれ短線文や刺突文がみられ、他の土器よりも装飾性が豊かである。

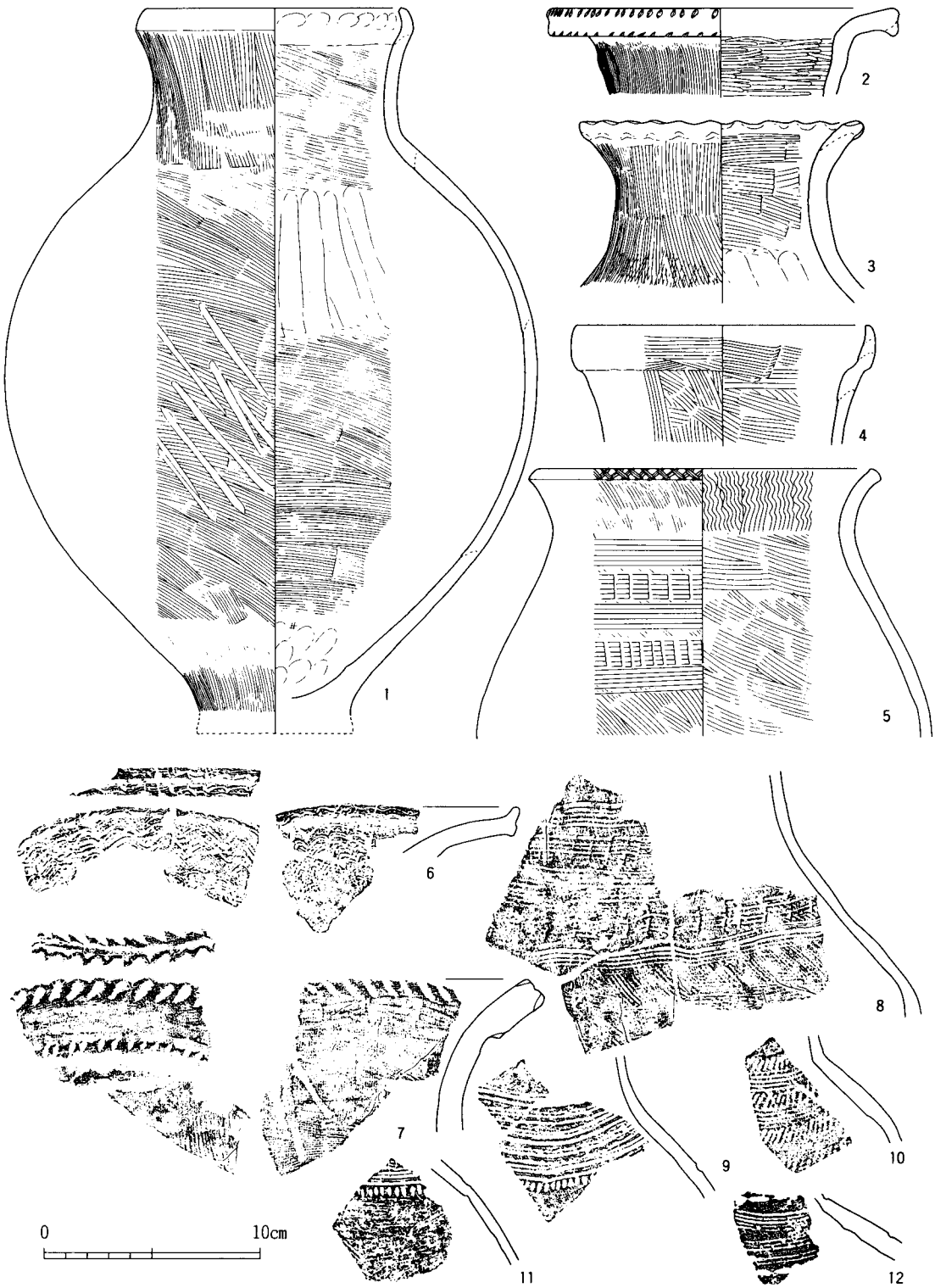
体部の状態がわからないので全体像は判然としない。条痕文系土器の影響を受けたと思われる土器（10－12のような波状の口縁のもの）が見られる一方で、一般的な形態を示し主に刺突文で飾られた一群がある。文様は口縁端部に集中してみられ、甕の構成要素の一つになっている。

条痕文系土器（第22図16～29、第23図２～６）

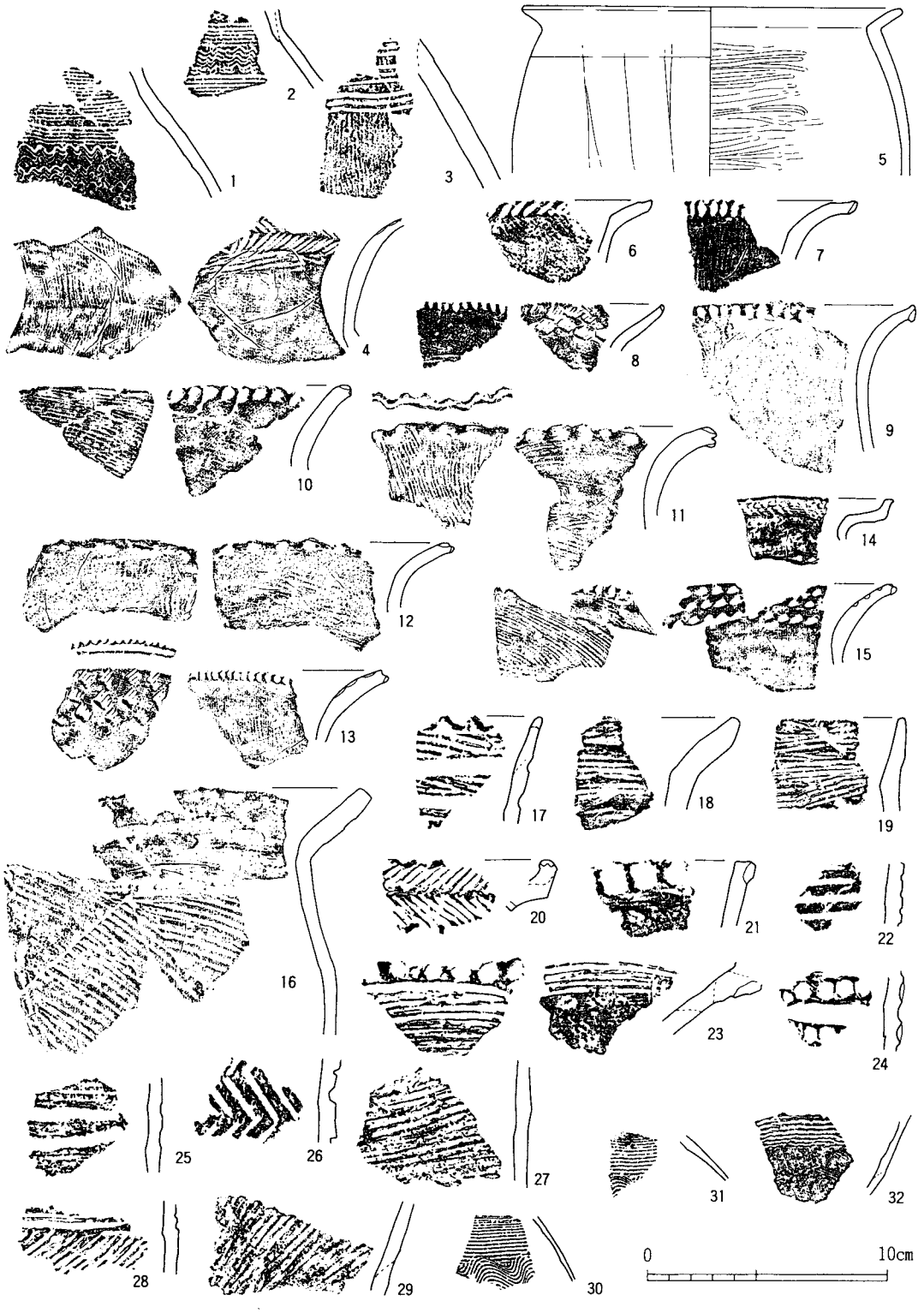
器形の全体がわかるものは皆無であるが、概ね甕（深鉢）形態と壺形態であろう。22－16は「く」字の口縁をもち、17や19のような波状にはならない。17・25は口縁直下に指による沈線（凹線）がある。外面に粗く条痕のみられる17等は甕（深鉢）である。20は壺の口縁で受口状を呈しヘラによって綾杉文を施す。

条痕文系土器に施された文様は指先・ヘラ・棒状のものによって施されたもので、刺突文・綾杉状文・凹線がある。総体的に胎土は粗く、海綿骨片やチャートが目立ち弥生土器と対照的である。

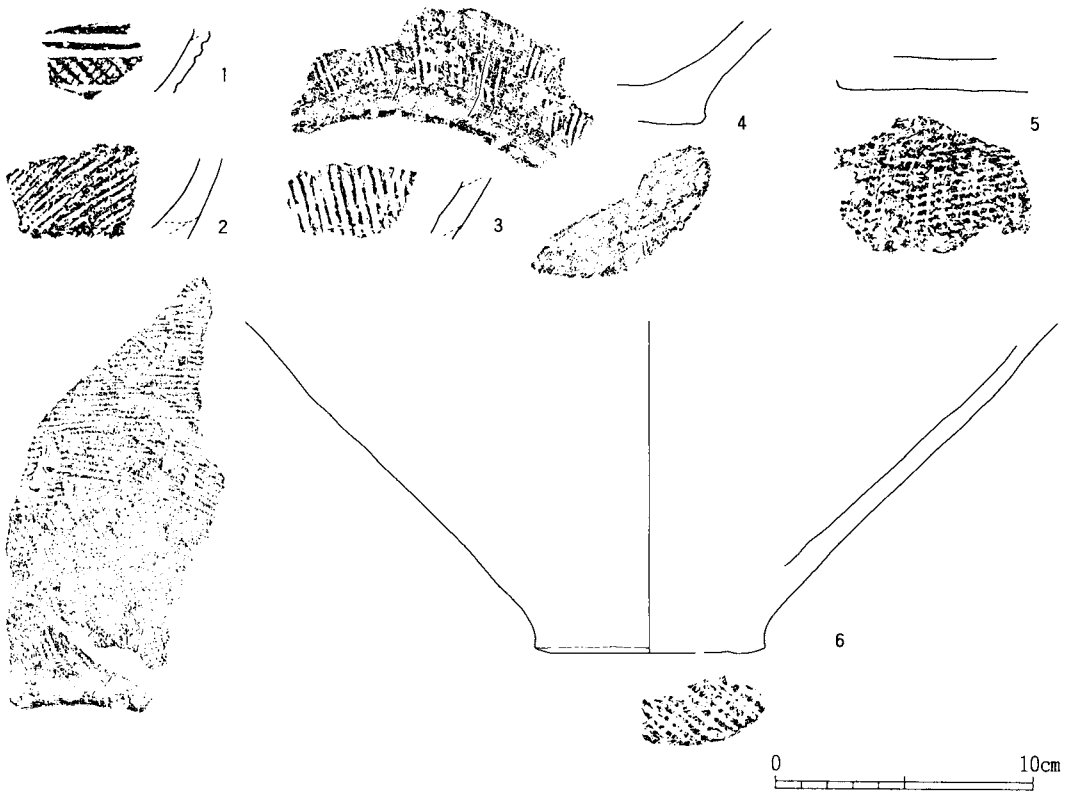
その他の土器（第22図30～32、第23図１）



第21図　弥生土器・その他実測図（S＝⅓）



第22図　弥生土器・その他実測図（S＝⅓）



第23図　弥生土器・その他実測図（S＝⅓）

22－30～32の外面には端正な櫛描直線文や波状文が施されているものの、内面はヘラケズリが施されている。このような例は弥生中期の土器にはなく月影式土器かとも思われるが、類例がない以上推測の域を出ない。23－1は沈線に区画された内部に縄文が施されている。

最後に簡単に纏めたい。小破片が大多数なので編年的位置づけは困難であるものの、弥生時代の土器のうち前期の遠賀川式土器や凹線文で飾られた土器を確認できなかった。これは第1次調査の所見と矛盾するものではない。[1]

全体的な土器量から言えば、条痕文系土器の占める割合はかなり大きいものである。石川県内の場合、少なくとも畿内第Ⅲ様式併行時（小松式土器）には条痕文系土器との共伴が認め難い。また、本遺跡出土弥生土器は櫛描波状文、簾状文、斜行短線文、口縁端部のヘラ先による刺突文の存在から概ね小松式の範疇で捉えることができる。すなわち、条痕文系土器の存在から小松式土器よりも遡上する土器の一群の存在が考えられ、稚拙な直線文を主とした土器や指の押圧によって小さな波状の口縁を作り出している1群をそれにあてることができようか。一方、第1次調査出土の条痕文系土器が柴山出村式でも新しい様相のみられるものなので、[2] 今日の出土例もほぼ同時期と考えて大過ないものと考えられる。

注

(1)　橋本澄夫「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」『石川考古学研究会会誌』第18号　昭和50年

(2)　湯尻修平「柴山出村式土器について」『石川考古学研究会会誌』第26号　昭和58年

第12図～第15図　土器観察表

※石＝石粒・赤＝赤色粒・焼＝焼土塊・海＝海綿骨片

図番号	出土地点	器種	法量(cm)	調整 外面 内面	胎土 石	胎土 赤	胎土 焼	胎土 海	色調 外 内	備考
12 -1	土器溜り	甕	口 径15.0	擬凹線5条・ヨコナデ ヨコナデ・ケズリ	多				にぶい橙色	外面煤付着
-2	〃	〃	口 径15.3	擬凹線8条・ヨコナデ ヨコナデ・ケズリ	少			少	にぶい黄橙色	同　上
-3	〃	〃	口 径14.7	擬凹線6条以上・ヨコナデ ヨコナデ・ケズリ	中			少	にぶい黄褐色 褐色	同　上
-4	〃	〃	口 径18.7	擬凹線7条以上・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多				にぶい黄橙色	外面煤付着 内面炭化物付着
-5	〃	〃	口 径17.8	擬凹線9条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ケズリ	中				淡黄褐色	外面煤付着
-6	〃	〃	口 径17.3 胴 径18.2	擬凹線5条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多				浅黄橙色	同　上
-7	〃	〃	口 径15.7	擬凹線5条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ？・ケズリ	中	少		中	にぶい橙色	同　上
-8	〃	〃	口 径17.8	擬凹線7条・ナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	中				にぶい黄橙色	同　上
-9	〃	〃	口 径20.2	擬凹線10条以上・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ケズリ	中				淡褐色	同　上
-10	土器溜り B-7包含層	〃	口 径18.0	擬凹線9条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	中	少		少	灰黄色	同　上
-11	土器溜り	〃	口 径21.1	擬凹線6条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多				暗褐色 淡褐色	同　上
-12	〃	台付 甕？	口 径16.0 胴 径14.9	擬凹線9条・ヨコナデ・ハケ・「ミガキ状」痕 ヨコナデ・「ミガキ状」痕・ケズリ	多			少	にぶい橙色	外面煤付着 内面一部炭化物付着
13 -13	〃	甕	口 径18.7	擬凹線11条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多				にぶい黄橙色	外面煤付着 指頭圧痕2段
-14	〃	〃	口 径18.0	擬凹線8条・ナデ・「ミガキ状」痕 ヨコナデ・ケズリ・「ミガキ状」痕	多	少			褐灰色 明褐灰色	外面煤付着
-15	〃	〃	口 径19.1	擬凹線11条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多	少			にぶい橙色	
-16	〃	〃	口 径19.8 胴 径21.3	擬凹線9条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ・ナデ	中				暗褐色	外面煤付着
-17	〃	〃	口 径19.6 胴 径22.0	擬凹線9条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	中				にぶい黄橙色	同　上
-18	〃	〃	口 径21.5	擬凹線10条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多				淡黄橙褐色	同　上
-19	〃	〃	口 径27.0	擬凹線9条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多				淡黄色	
14 -20	〃	〃	口 径30.0	擬凹線13条・ヨコナデ ヨコナデ・ハケ・ケズリ・ナデ	多	少			にぶい黄橙色	
-21	〃	甕 (台付鉢)	口 径32.0 胴 径29.8	擬凹線6条・ヨコナデ・ハケ 摩耗のため不明	多	少	中	少	淡橙色	22と同一個体
-22	〃		脚部径10.6	摩耗のため不明	多	少		少	淡橙色	21と同一個体
-23	〃	甕	口 径23.0	擬凹線8条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多			少	浅黄橙色	外面煤付着 指頭圧痕2段
-24	〃	〃	口 径35.3 胴 径37.0	擬凹線11条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多				にぶい黄橙色	63と同一個体
-25	〃	〃	口 径14.6	ヨコナデ・ケズリ ヨコナデ・ハケ	多	中		少	にぶい黄褐色	外面煤付着
-26	〃	〃	口 径15.5	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ケズリ	中				にぶい黄橙色	同　上
-27	〃	〃	口 径16.8	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	中	少			にぶい黄橙色	同　上
-28	〃	〃	口 径15.1	ヨコナデ ヨコナデ	中				明褐色	
15 -29	〃	〃	口 径17.7	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多			少	灰黄色	外面煤付着
30	〃	〃	口 径16.3	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ケズリ・ナデ	多	少			にぶい橙色	

第15図～第17図　土器観察表

※石＝石粒・赤＝赤色粒・焼＝焼土塊・海＝海綿骨片

図番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整 外面 内面	胎土 石	胎土 赤	胎土 焼	胎土 海	色調 外 内	備考
-31	土器溜り	甕	口　径16.2	ヨコナデ ヨコナデ・ケズリ	少				にぶい黄橙色	
-32	〃	〃	口　径14.8	ヨコナデ・ハケ ハケ・ヨコナデ・ケズリ	多			少	にぶい黄橙色	
-33	〃	〃	口　径12.0	ヨコナデ ヨコナデ・ケズリ	多				にぶい橙色	
-34	〃	〃	口　径16.5	ナデ・ハケ ハケ・ケズリ	多			少	にぶい褐色	
-35	土器溜り B-6包含層	壺	口　径23.7	擬凹線14条以上・ナデ ヨコナデ・ケズリ・ナデ	多	少	少		淡橙褐色	
-36	土器溜り	〃	口　径14.6 胴　径24.0 底　径 4.0 器　高(29.3)	ヨコナデ・ハケ・ナデ ヨコナデ・ハケ・ナデ	多			中	淡橙褐色 内面一部黒色	底部にヘラ記号
-37	〃	〃	口　径20.0	擬凹線８条以上・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ナデ	中	少		中	にぶい黄橙色 暗褐色	
-38	〃	〃	口　径12.6 胴　径21.2	擬凹線８条・ハケ・「ミガキ状」痕 「ミガキ状」痕・ケズリ・ナデ	多			少	にぶい褐色	外面煤付着
16 -39	〃	〃	口　径10.7 胴　径14.5 底　径 (1.0) 器　高14.3	ミガキ ミガキ・ケズリ・ナデ	多				灰黄褐色	
-40	〃	〃	口　径11.4	ヨコナデ・ケズリ ヨコナデ・ケズリ・ナデ	中	少		中	褐　色 明褐色	
-41	〃	〃	口　径12.3	ミガキ ミガキ・ケズリ・ナデ	中	少			灰褐色	外面煤付着
-42	〃	〃	口　径 8.3 胴　径12.5	ミガキ・ナデ ナデ	中			少	黄褐色	
-43	〃	〃	口　径13.5	ナデ・ハケ ナデ	多	中		少	橙　色	頸部にキザミ
-44	〃	〃	口　径14.9	ナデ・ハケ ナデ・ハケ・ケズリ	多	中		中	にぶい黄橙色	
-45	〃	高杯	口　径27.5	摩耗のため不明	多	中		少	にぶい黄橙色	
-46	〃	〃		ミガキ ミガキ・ナデ	中	少		少	にぶい褐色	
-47	〃	〃	裾部径14.3	ミガキ・ハケ・ナデ ナデ	中	少			にぶい黄橙色 灰黄褐色	２孔１組３箇所穿孔
-48	〃	〃	裾部径14.5	ミガキ	中	少		少	にぶい黄橙色	
17 -49	〃	器台	受部径24.5 裾部径15.5 器　高15.0	ミガキ ミガキ・ナデ	中	少			灰黄褐色	
-50	〃	〃		ミガキ・赤彩 ハケ・ナデ	中	少			灰黄色	
-51	〃	〃	裾部径 8.8	ミガキ ケズリ・ナデ・ミガキ	多				にぶい黄橙色	２孔１組３箇所穿孔 受部に石粒多い
-52	〃	〃	裾部径12.0	ミガキ ケズリ・ナデ・ハケ	中	中			にぶい黄橙色	
-53	〃	結合 器台		ミガキ ナデ	中	少	少	少	にぶい黄橙色	
-54	〃	蓋	口　径12.5 器　高 5.7	ナデ ナデ・ハケ	多				にぶい黄橙色	
-55	〃	〃	口　径 8.0	ナデ・ミガキ・赤彩 ナデ・ミガキ・赤彩	中	少		中	赤褐色	
-56	〃	鉢	口　径16.5	ハケ・ナデ ナデ・ケズリ	多				にぶい橙色 黒　色	
-57	〃	〃	口　径15.0 胴　径13.6	ヨコナデ・ハケ・ミガキ ヨコナデ・ケズリ・ミガキ	多	少			にぶい黄橙色	

第17図～第19図　土器観察表

※石＝石粒・赤＝赤色粒・焼＝焼土塊・海＝海綿骨片

図番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整 外面 内面	胎土 石	胎土 赤	胎土 焼	胎土 海	色調 外 内	備考
-58	土器溜り	鉢	口　径12.0 胴　径 9.5 底　径 2.9 器　高 8.6	擬凹線6条・ヨコナデ・ハケ・ナデ ヨコナデ	多				にぶい黄橙色 浅黄色	外面煤付着
-59	〃			ハケ・ナデ ケズリ	多			少	にぶい黄橙色	
-60	〃	小型 土器	口　径 6.0 胴　径 8.2	ミガキ ナデ・ケズリ・ミガキ	多			少	明赤褐色	
-61	〃	〃	胴　径 7.6 底　径 3.1	ナデ・赤彩 ナデ	多	少		少	にぶい橙褐色	
-62	〃	注口 土器	胴　径15.6 底　径 2.2	ハケ・ミガキ ケズリ・ナデ	中	少			にぶい褐色	
-63	〃	甕	底　径 3.6	ハケ ケズリ	多				にぶい黄橙色	24と同一個体
-64	〃	〃		波状文・ナデ ヨコナデ	多	少		中	灰褐色	
-65	〃			擬凹線10条・S字状スタンプ・ナデ ナデ	多			少	にぶい黄橙色 灰褐色	
18 -66	住居跡	甕	口　径15.7	擬凹線5条・ナデ・ハケ ナデ・ハケ・ケズリ	中				にぶい黄橙色	外面煤付着
-67	〃	〃	口　径16.0	擬凹線6条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ケズリ	多				淡黄色	
-68	〃	〃	口　径14.4 胴　径19.0	ヨコナデ・タタキ・ハケ ヨコナデ・ケズリ・ナデ	中			中	暗褐色 にぶい黄橙色	外面煤付着
-69	〃	〃	口　径(13.0) 胴　径17.0	ハケ・ナデ ナデ	多			少	にぶい黄橙色	
-70	〃	鉢	口　径13.6 胴　径12.7 底　径 1.8 器　高11.2	ヨコナデ・ハケ・ナデ ヨコナデ・ケズリ	中				淡黄褐色	
-71	〃	〃	口　径12.7 底　径 2.2 器　高 3.0	ハケ・ミガキ ミガキ	多			少	灰白色	
-72	〃	〃	口　径13.3	ミガキ ミガキ	多				淡黄色	
-73		小型 器台	裾部径 9.8	ミガキ ハケ・ナデ	多			少	灰白色	径8㎜の孔3箇所 穿孔
-74	土坑8 上部層	甕	口　径18.0	擬凹線4条以上・ヨコナデ ヨコナデ・ナデ・ケズリ	多				淡黄褐色	外面煤付着
-75	土坑4 上部層	〃	口　径18.6	擬凹線7条・ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ケズリ	多				淡褐色	外面煤付着 内面炭化物付着
76	B－2 包含層	〃	口　径14.7	ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ケズリ	中			少	暗褐色 淡褐色	外面煤付着
-77	包含層	〃	口　径13.5	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ケズリ	中			中	明褐色	同　上
19 -78	〃	〃	口　径12.0	ヨコナデ・ハケ ハケ・ナデ	中				灰白色	同　上
-79	A－2 包含層	〃	口　径14.0	ハケ ハケ	少			中	橙　色	
-80	C－1 包含層	〃	口　径20.3	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ナデ・ケズリ	多				淡橙色	外面煤付着 内面炭化物付着
-81	C-1・2・B-3 包含層	甕	口　径16.2	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ	中			多	にぶい橙色	頸部にキザミ
-82	C－2 包含層	〃	口　径15.0	ハケ・ナデ・ミガキ ミガキ・ハケ・ナデ	多				橙褐色	
-83	〃	〃	口　径15.0	ヨコナデ・ハケ ヨコナデ・ハケ・ケズリ	多			中	にぶい黄橙色	
-84	包含層	〃	口　径13.5	擬凹線10条以上・ヨコナデ ミガキ・ケズリ	多				にぶい黄橙色	

第19図～第20図　土器観察表

※石＝石粒・赤＝赤色粒・焼＝焼土塊・海＝海綿骨片

図番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整 外面 内面	胎土 石	胎土 赤	胎土 焼	胎土 海	色調 外 内	備考
-85	C－2 包含層	壺	口　径17.5	ヨコナデ・ケズリ・ナデ ヨコナデ	少			多	にぶい黄橙色	
-86	C－6 包含層	〃		ヨコナデ ヨコナデ	少			少	にぶい黄橙色	口縁部にスタンプ文
-87	B－7 包含層	器台	受部径25.4	ヨコナデ・ハケ ナデ・ハケ	多				淡黄褐色	
-88	B－2 包含層	〃	受部径21.5	擬凹線５条・ミガキ・赤彩 ミガキ・赤彩	多				暗褐色 暗赤褐色	
-89	包含層			ナデ ナデ・ハケ	多			中	灰黄色 黒褐色	平行直線文・波状文
20 -90	A－7 包含層	高杯	口　径24.5	ミガキ・ハケ ミガキ	少	少		少	橙　色	
-91	C－6 包含層	〃		ミガキ ミガキ	中				にぶい黄橙色	補修孔４箇所
-92	C－6 包含層	〃	口　径27.0	ミガキ・赤彩 ミガキ	多				にぶい黄橙色	
-93	包含層	〃		ミガキ ミガキ・ハケ	多	少			にぶい黄橙色	径５㎜の孔４箇所 穿孔
-94	B－7 包含層	高杯 （鉢）	口　径19.0	ミガキ ミガキ・細かい「ミガキ状」痕	多	少		少	にぶい褐色	
-95	包含層	〃	口　径15.8	ミガキ ミガキ	中				浅黄橙色	
-96	C-4・D-4 包含層	器台	受部径20.0	ナデ・ミガキ ハケ・ミガキ	中	少		少	橙　色	
-97	B-7・C-7 包含層	〃	受部径21.5	ミガキ ミガキ・ナデ	中		中	中	明褐色 にぶい橙色	径7.5㎜の孔３箇所 穿孔
-98	B－3 包含層	小型 器台	受部径 8.3	ミガキ・赤彩 ナデ・ハケ・ミガキ・赤彩	中	少		中	にぶい橙色 にぶい褐色	径11㎜の孔３箇所 穿孔
-99	B－3 包含層	〃	受部径 8.5	ミガキ ミガキ	少			中	にぶい橙色	径12㎜の孔３箇所 穿孔
-100	B－3 包含層	〃	裾部径10.3	ハケ・ミガキ ハケ	中			少	にぶい橙色	径12㎜の孔４箇所 穿孔
-101	C－2 包含層	結合 器台		ミガキ ミガキ	多				橙　色 にぶい橙色	
-102	C－3 ピット１	小型 土器	口　径 9.1	ヨコナデ・ナデ ヨコナデ・ナデ	多			少	灰黄褐色	外面煤付着
-103	B－2 包含層	〃	口　径 7.4	ヨコナデ・ハケ・ナデ ナデ	中	少		中	淡褐色	外面煤付着
-104	C－2 包含層	鉢	口　径12.5 胴　径10.3	ヨコナデ・ミガキ・赤彩 ヨコナデ・ケズリ・ミガキ・赤彩	中				にぶい橙色	
-105	B-C・D-3 包含層	〃	口　径11.4 胴　径 9.6 底　径 1.4 器　高 7.8	ヨコナデ・ケズリ・ナデ ヨコナデ・ケズリ・ナデ	多	少			にぶい黄橙色 にぶい赤橙色	
-106	B－2 包含層		脚部径 6.3	ハケ・ナデ ハケ・ナデ	多			中	灰白色	
-107	B－2 包含層		脚部径 9.0	ハケ ナデ	多				灰白色	
-108	包含層		脚部径 7.1	ミガキ ハケ・ミガキ	少	少			にぶい褐色	
-109	包含層		脚部径 7.0	ヨコナデ ハケ・ナデ	多	少			にぶい黄褐色	

第21図～第22図　土器観察表

※石＝石粒・赤＝赤色粒・焼＝焼土塊・海＝海綿骨片

図番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整 外面 内面	胎土 石	胎土 赤	胎土 焼	胎土 海	色調 外 内	備考
21 -1	B－2 土坑	壺	口　径11.8 体　径24.7	ハケメ・部分的ヘラミガキ 指ナデ・ナデ・ハケメ	多		多		灰白色	
-2	C－2 土坑6	〃	口　径16.2	ハケメ・ナデ ナデ・ヘラミガキ	微				淡黄橙色	
-3	C-3・ピット1 C-2住居内	〃	口　径12.7	ハケメ 指ナデ・ハケメ	少	少			灰白色	
-4	B－2 C－2	〃	口　径13.3	ハケメ ハケメ	少				淡黄橙色	
-5	1ライン 排水溝	〃	口　径15.3	ハケメ ハケメ	多				暗灰黄色 灰黄色	直線文・簾状文 煤付着
-6	C－2 B－2	〃		ヘラミガキ ――	中				黒褐色	波状文
-7	1ライン	〃		ハケメ・のちナデ ハケメ	中	微			灰褐色	
-8	C－2 溝	〃		ハケメ ハケメ・ナデ	微				淡灰黄色	直線文・簾状文 煤付着
-9	包含層	〃		ハケメ ナデ	中				灰褐色	直線文・刺突文
-10	包含層	〃		―― 指ナデ	少				灰褐色	直線文・刺突文
-11	包含層	〃		板ナデ ハケメ・ナデ	少				褐　色 灰褐色	直線文・刺突文
-12	C－7 包含層	〃		―― ――	中				淡赤灰色	直線文・刺突文
22 -1	B-7 B-6ピット	〃		―― 指押え・ハケメ	多				灰褐色 淡灰黄色	直線文・波状文 煤付着
-2	C－7	〃		―― ハケメ	少				淡灰黄色 灰褐色	直線文・波状文
-3	C－7	〃		ハケメ ナデ	多				淡灰褐色	直線文
-4	C－7 土坑	〃		ハケメ ナデ	少		少		灰白色	綾杉文
-5	土坑5	甕	口　径17.4	板ナデ ヘラミガキ	少				灰褐色 明灰褐色	
-6	C－7	〃		ハケメ ――	少				淡灰黄色	刻み目
-7		〃		ハケメ・ナデ ――	少				淡灰褐色 灰褐色	刻み目
-8	B－3	〃		ハケメ ハケメ	中				淡赤灰色	短線文 刻み目
-9		〃		ハケメ ハケメ	多				赤灰色	刻み目（棒） 煤付着
-10	土坑6	〃		ハケメ ハケメ	少				灰褐色	刺突文（指）
-11	B－2	〃		ハケメ ハケメ	少	微			暗灰褐色 淡灰褐色	
-12	C－2	〃		ハケメ ハケメ	多				灰白色	
-13	土坑5	〃		ハケメ ナデ	少				暗灰褐色	短線文・刻み目 煤付着
-14	C－1	〃		ナデ ナデ	少				灰黄色	煤付着
-15	B－2 溝内	〃		ハケメ ナデ	中	微			淡灰褐色 淡黒褐色	刺突文・刻み目 煤付着
-16	包含層	〃		条痕 ――	多	少			淡灰褐色 灰褐色	
-17	土器溜り	〃		条痕 ――	多				明灰褐色 灰褐色	凹　線 煤付着
-18	B－3	〃		条痕 ナデ	多				灰褐色	煤付着

第22図～第23図　土器観察表

※石＝石粒・赤＝赤色粒・焼＝焼土塊・海＝海綿骨片

図番号	出土地点	器種	法量（cm）	調整 外面 内面	胎土 石	胎土 赤	胎土 焼	胎土 海	色調 外 内	備考
-19	C－2	甕		条痕 ケズリ・ナデ	少			少	淡灰褐色	
-20	C－3 遺構面			—— ——	少				淡灰黒色	
-21	C－7			条痕 ——	少				淡灰褐色	
-22	C－8			—— ナデ	多				灰褐色 淡暗灰褐色	不連続沈線
-23	C－7			条痕 条痕・ナデ	多				灰白色 黒灰色	
-24	C－4			—— ナデ	多				灰白色	
-25	C－7 泥炭層			条痕 ナデ	多				淡灰褐色	
-26	土器溜り			—— ナデ	多				黒灰色 暗灰褐色	綾杉文
-27	C－6			条痕 ナデ	多			少	灰褐色	煤付着
-28	B－6 包含層			条痕 ナデ	多	少			灰黄色	
-29	土器溜り			条痕 板ナデ・ナデ	中				黄褐色 暗灰褐色	内面に炭化物
-30	D－4 住　居			—— ヘラケズリ	中				淡灰黄色 灰白色	弥生土器(?)
-31	土器溜り			—— ヘラケズリ	少				淡灰褐色	弥生土器(?)
-32	B－2 土坑			板ナデ ヘラケズリ	少				明黄褐色	弥生土器(?)
23 -1	D－2			縄文 ナデ	少			少	淡灰黄色 灰褐色	縄文土器(?)
-2	C－7			条痕 ナデ	多			少	淡黄灰褐色 灰褐色	外面に煤付着 内面に炭化物付着
-3	B－7 サブトレ			条痕 ナデ	多				灰褐色 淡灰褐色	煤付着
-4	土器溜り			条痕 ナデ	多	少			淡灰黄色 灰黄色	
-5	C－6 土坑4			ナデ	多			少	灰褐色 暗灰褐色	網代圧痕
-6	D－2 土坑3			条痕 ナデ	多				淡灰黄色	網代圧痕

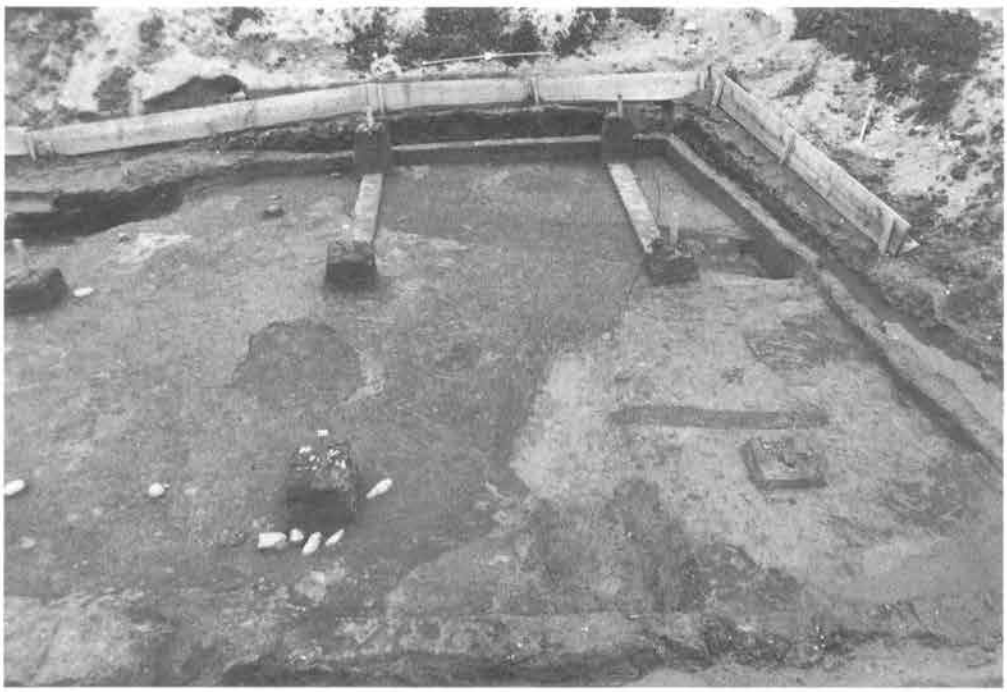
堆積砂の除去状況

調査風景

図版第 2

湛水した調査区

排水作業後の調査区



自然河道より南西側調査区の遺構検出状況（海側より）

自然河道より南西側調査区の遺構検出状況（南西より）

図版第 4

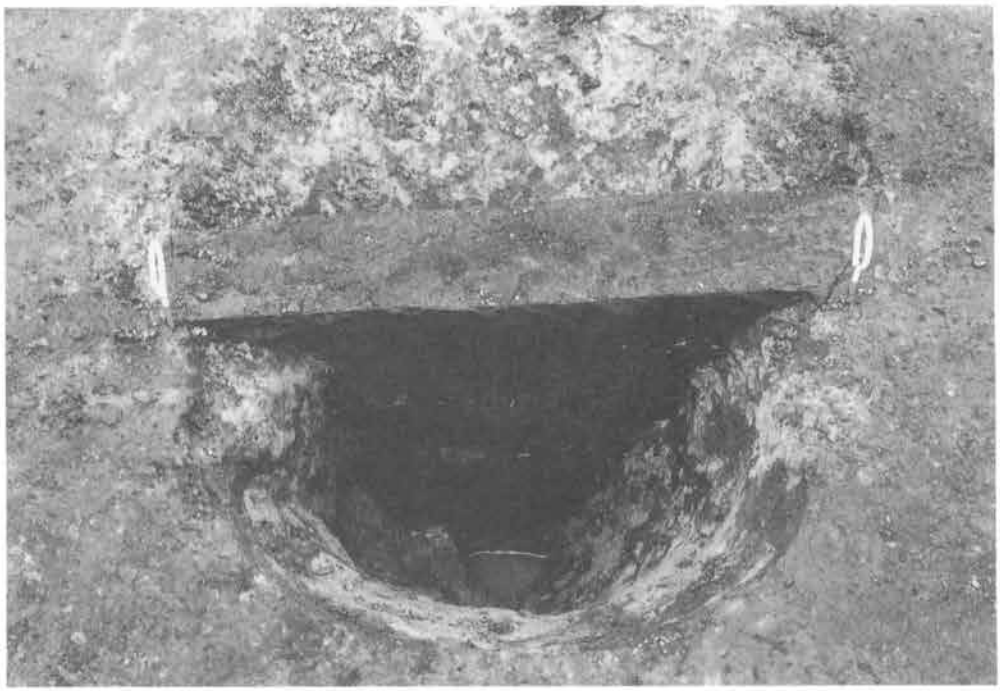
住居跡床面出土遺物（第18図－66）

住居跡床面出土遺物（第18図－68）

Ｃ－１グリッド遺物出土状況（第19図－79）

Ｃ－２グリッド遺物出土状況（第19図－83）

図版第 6



ピット 1 覆土

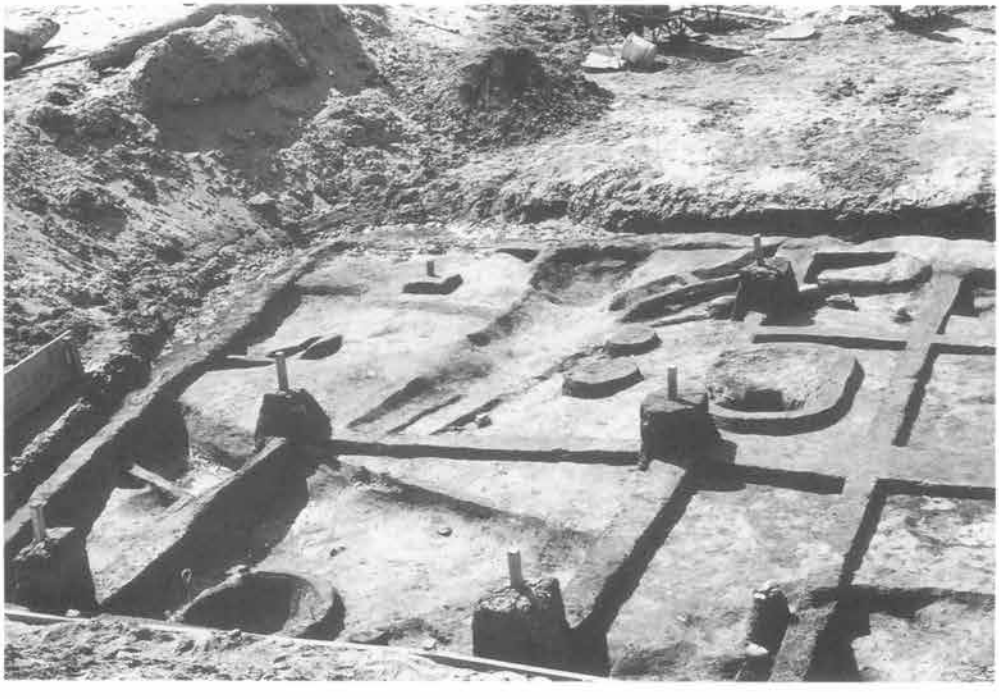
ピット 2 覆土

自然河道の堆積状況（西より）

自然河道の堆積状況（砂丘側より）

図版第 8

自然河道より南西側の調査状況（南西より）



自然河道より南西側の調査状況（砂丘側より）

自然河道より南西側の調査状況（砂丘側より）

B－6・C－6グリッド溝状の落ち込み（砂丘側より）

図版第10

C－7・C－8グリッド土器溜り遺物出土状況（海側より）

C－7・C－8グリッド土器溜り遺物出土状況（砂丘側より）

C－7・C－8グリッド土器溜り遺物出土状況（北東より）

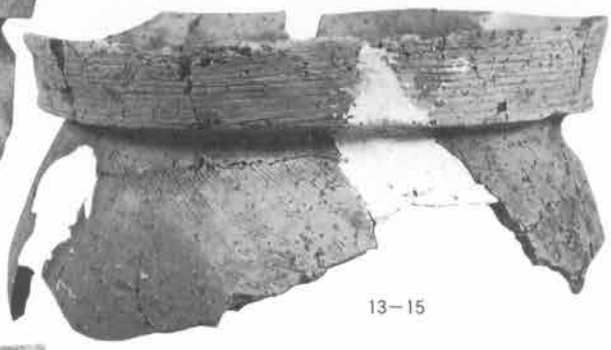
調査区全景（南西より）

図版第12

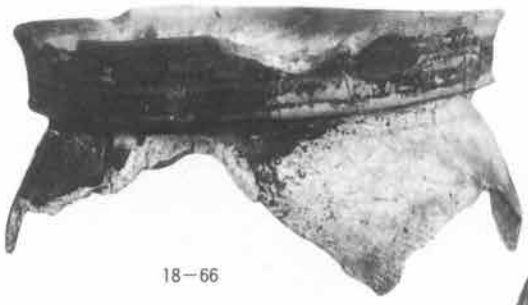
砂丘上より調査区を望む

埋め戻し状況

13−14



13−15

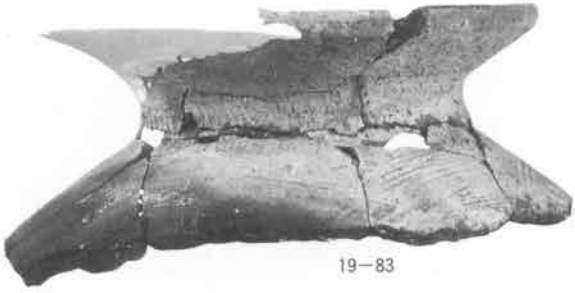


18−66

18−68

16−44

16−45

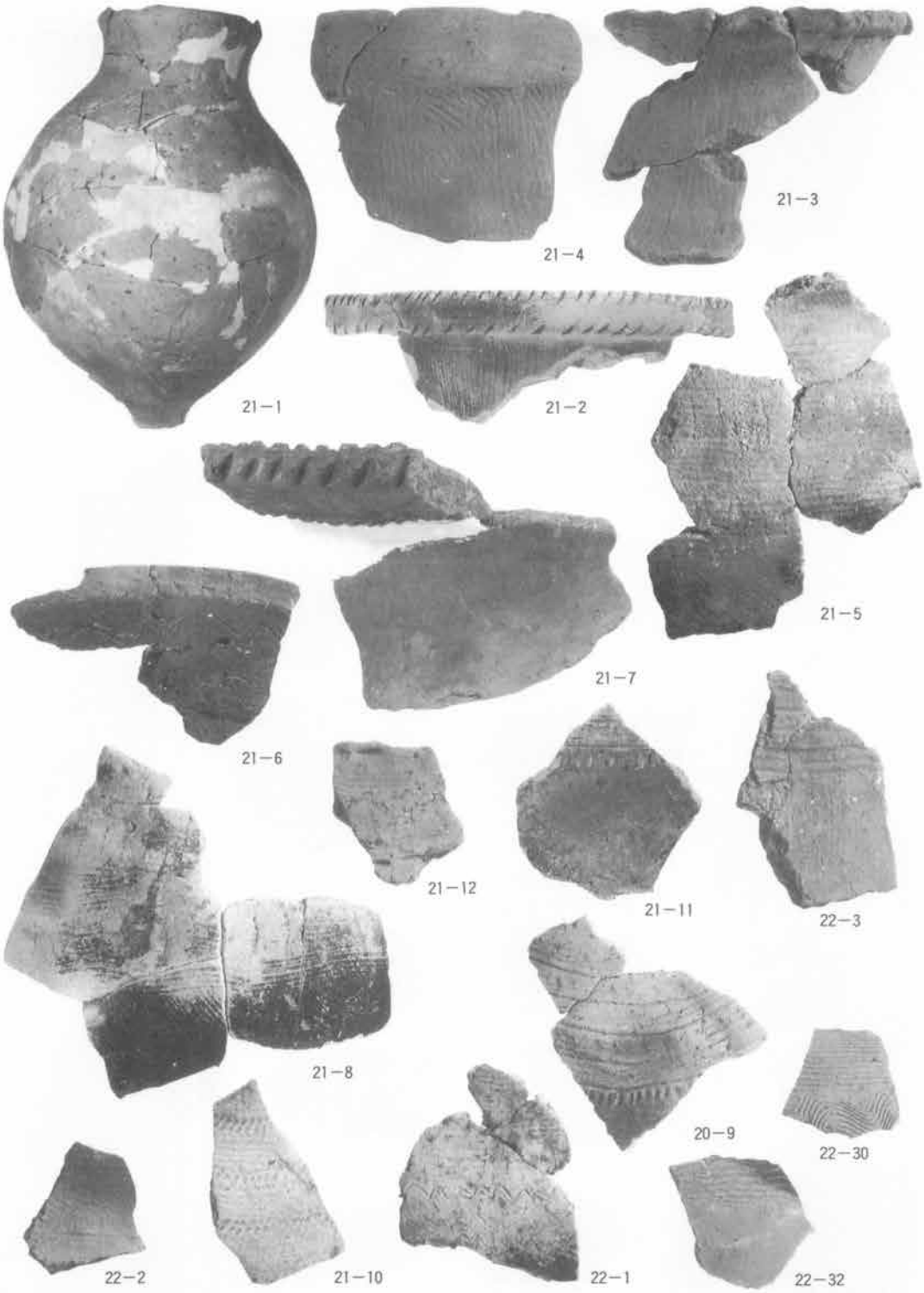


19−83

土器溜り・住居跡・包含層出土土器

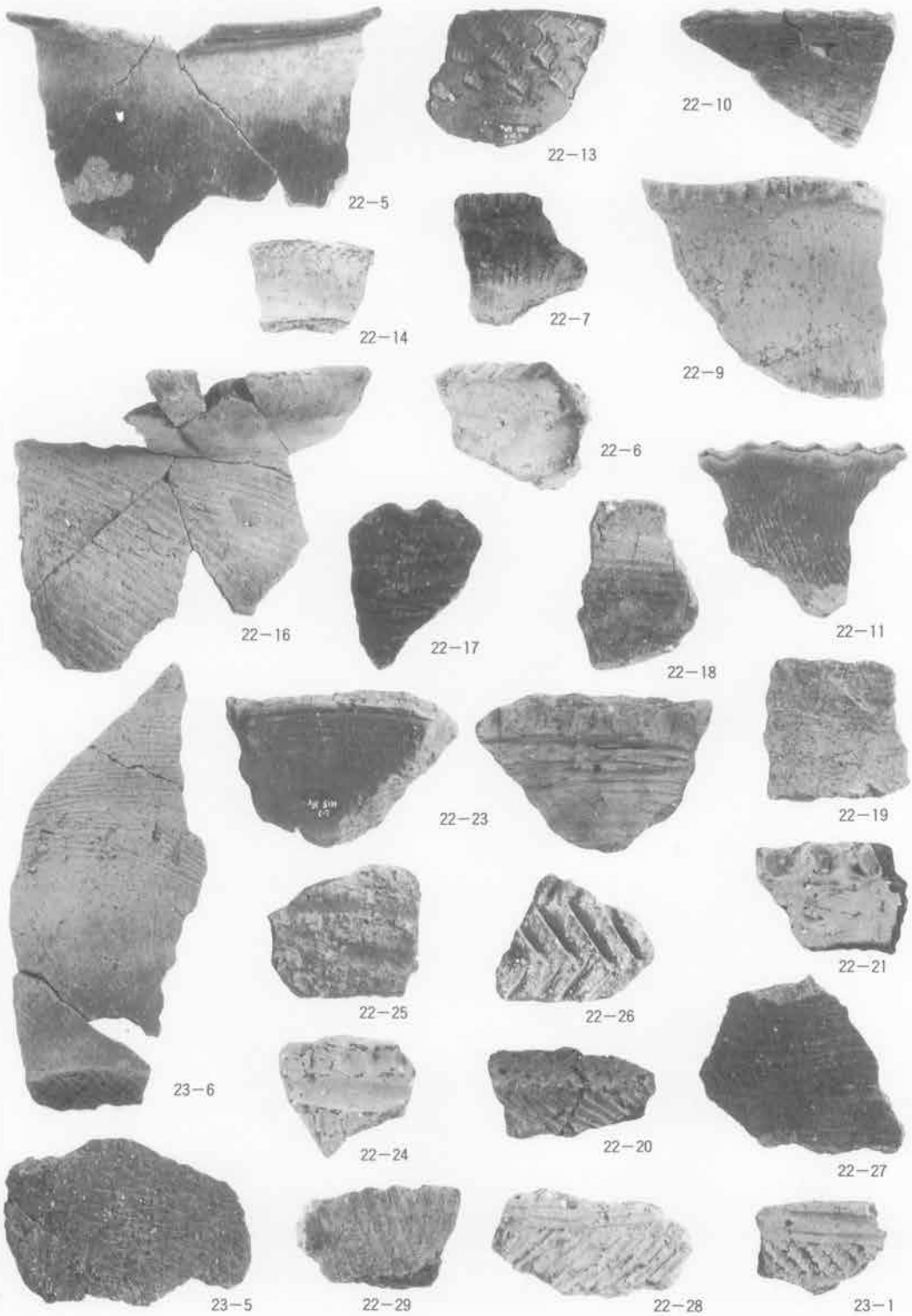
図版第14

土器溜り・住居跡出土土器


21−1
21−2
21−3
21−4
21−5
21−6
21−7
21−8
21−10
21−11
21−12
20−9
22−1
22−2
22−3
22−30
22−32

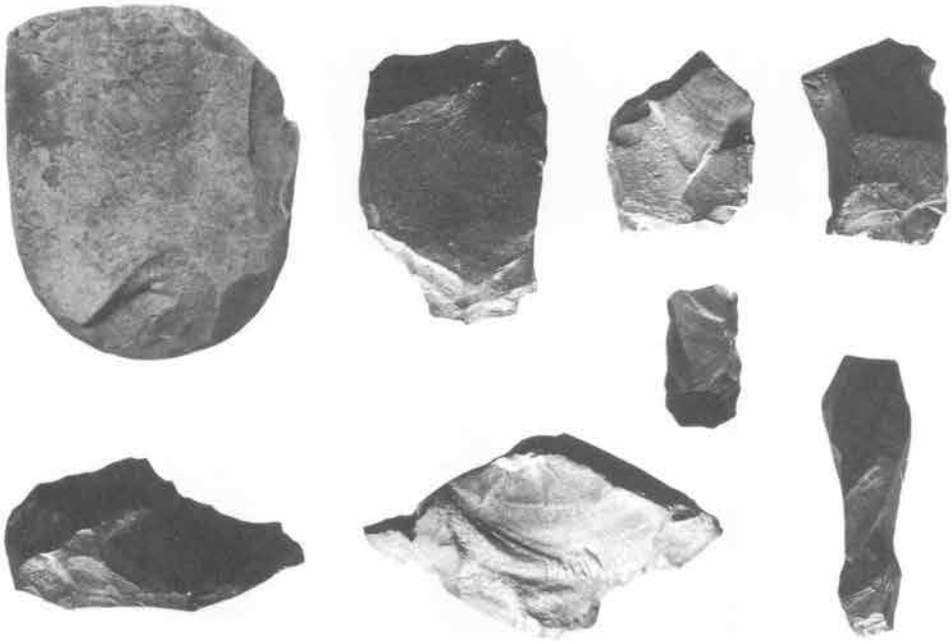
弥生土器・その他

図版第16



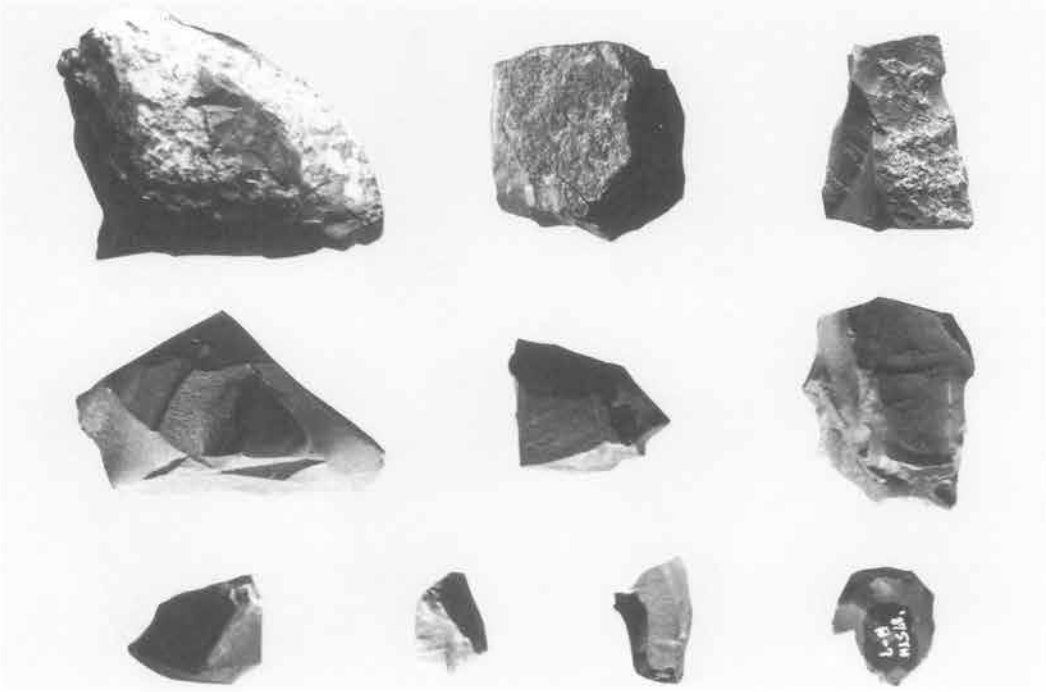
弥生土器・その他

銅鏃・石鏃・石錐



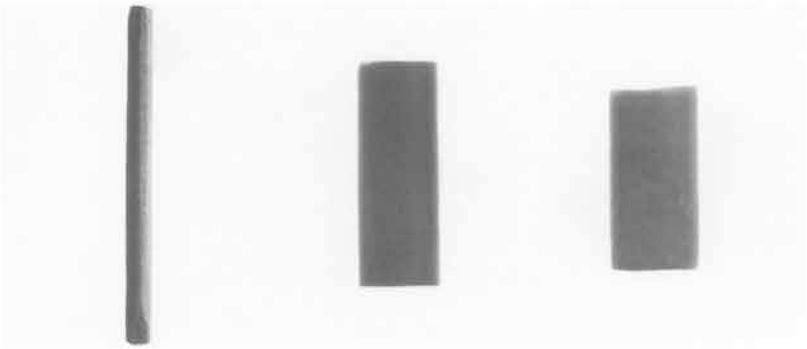
楔形石器

図版第18

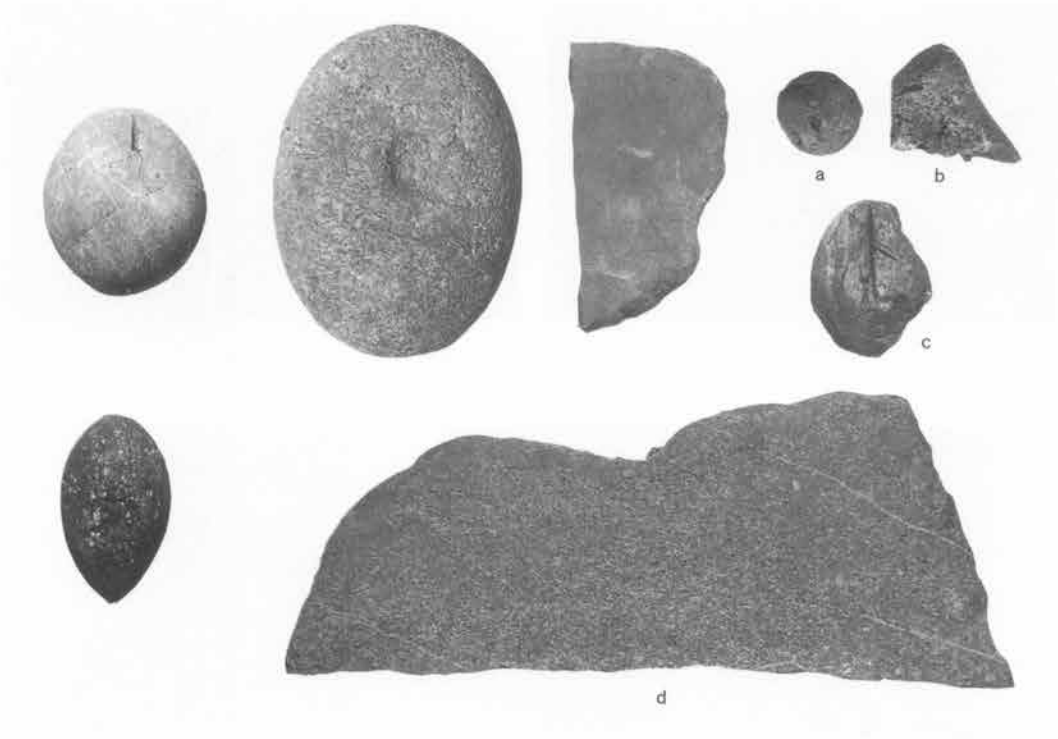


管玉等の石核・剝片・砕片

擦切溝をもつ剝片



針状石製品・管玉製品



敲石・磨石・砥石

砥石として用いられた軽石（C）の使用痕

図版第20

高杯（第20図－92）杯部外面の細く長いミガキ痕（約４倍）

甕（第13図－14）頸部内面のミガキ痕（約４倍）

第17図—65のスタンプ紋（約４倍）

Ｂ－２第４層出土炭化米（約３倍）

Ｂ－２第４層出土炭化種子（約３倍）

下安原海岸遺跡

昭和63年3月20日　印刷
昭和63年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43—7692番(代)

印　　刷　能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵町7—14

©石川県立埋蔵文化財センター　1988